

修善寺町史料第二集

伊豆修善寺町出口遺跡調査報告

—縄文時代中期集落の一形態—

1 9 6 4

静岡県教育委員会
修善寺町教育委員会

伊豆修善寺町出口遺跡調査報告

——縄文時代中期集落の一形態——

1. ま え が き

北伊豆には従来から知られた縄文遺跡がきわめて多い。静岡県遺跡地名表(1961年刊)掲載のものだけでも206を数え、その後の増加を考慮すると、発見数は250を超える勢いである。しかしこれらの中で正式に発掘調査されたものは、三島市千枚原遺跡始め10箇所程度に過ぎない。しかも部分的発掘が多く、遺跡全般の様相を知り得る資料は皆無に等しい状態にあつた。この事は単に北伊豆のみでなく、静岡県東部の550を超える縄文遺跡全般を通じてもいえることであつた。こうした折に、修善寺町大野区において、農業構造改善事業の進展中、はからずも、これから述べようとする出口遺跡が発見され、その大要を知る機会に恵まれたわけである。

しかし、ブルドーザーの削面下から次々と住居址が発見され破壊されて行く中での応急の調査であり、元旦直後の厳寒や人員集め等、極めて困難な条件下におかれ、十分の調査ができなかつたことは、まことに遺憾であつた。今後も修善寺町では同様の農地構造改善工事が続き、それと共に最初から調査される縄文遺跡も2~3予定されているので、別の機会にまた総合的に考究する機会もあることと思うが、縄文時代の中期の集落のあらましを知り得る貴重な遺跡であるから、とりあえず報告し、大方の参考に供することにした。

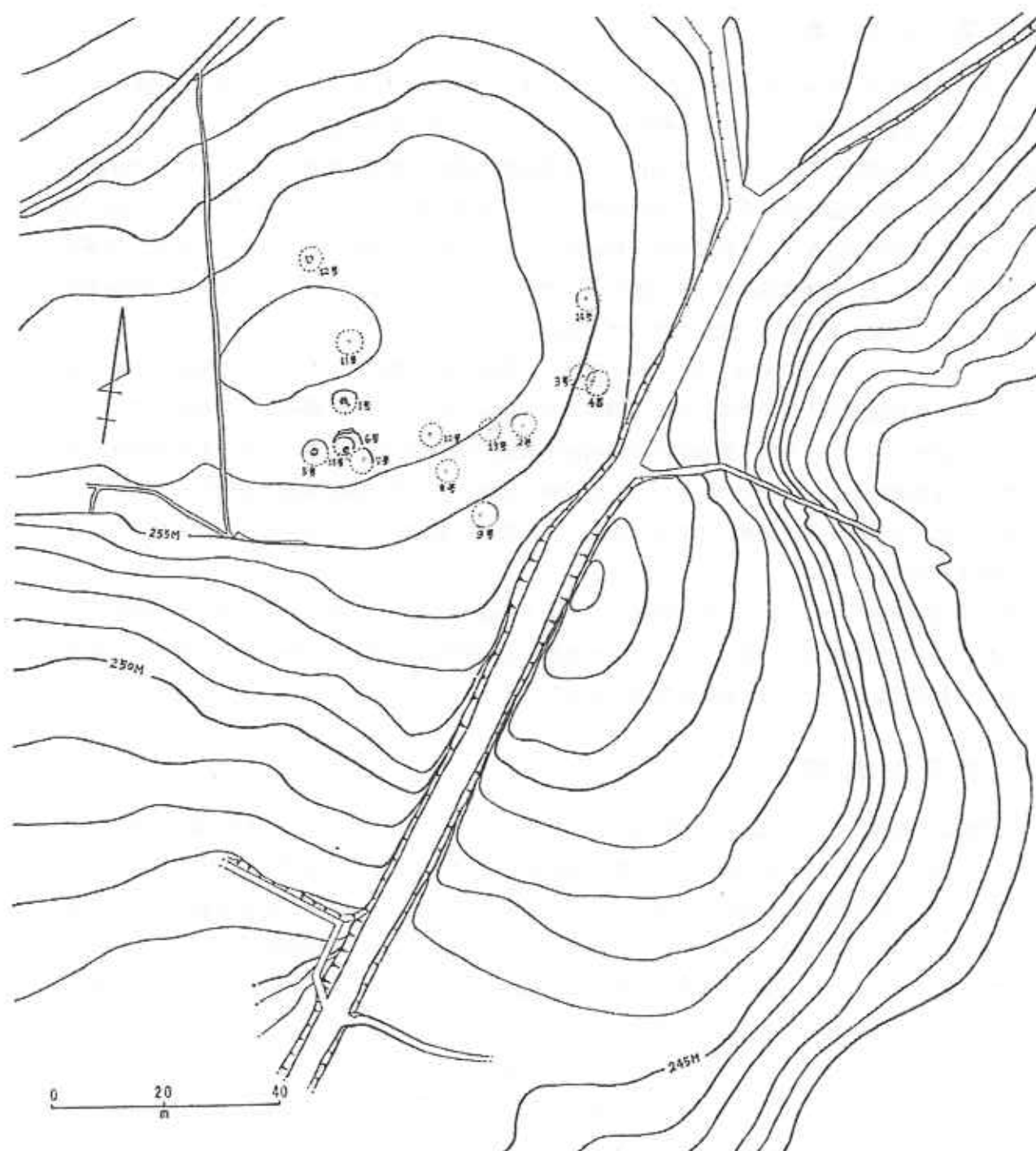
なお本遺跡調査に当つては、その発見者及び事実上の推進者として、物心両面にわたり献身的努力をされた長倉紫朗氏があり、また発掘・測量・製図・遺物整理と大変な努力を払われた尾形礼正氏の在ることを明記して、その労に心より感謝する次第である。

2. 地 理 的 景 観

本遺跡は田方郡修善寺町大野字出口にあり、中伊豆の中心、修善寺駅(伊豆箱根鉄道)から東北方へ山中を登ること約5kmの地点にある。(第1図参照)大野区は狩野川の支流である大野川に沿つて展開し、幾つかの小部落に分かれているが、その中で最も奥地に当る山ノ畑部落の東北高所に出口遺跡が立地している。標高265m付近、周縁は山景のみで、きわめて静かな環境の中に存在している。遺跡の占拠するこの大野丘陵は、宇佐美火山の西斜面にあり、雨水の侵蝕による深い谷間に挟まれた放射状丘陵の一つである。方向は東北より西南に向かい緩やかに傾斜している。丘陵上はかなり広く、「大野」の名にふさわしいが、大小いくつもの起伏があり、その凹地の一つには「小池」の名がある如く、湧泉も見られる。水は集落立地の上で最も重要な因子であるから、この湧泉と付近の遺跡との関連はきわめて深い。凸部、すなわち「ふくらみ」をもつた地域には、それぞれ遺跡が存在し、いずれも縄文時代のものであるが、出口遺跡もその一つとして存在している。東側の凹地を越えた向う側の「ふくらみ」には、湧泉に近く沖原遺跡があり、南側の凹地を越えた丘陵の上にも菅ヶ沢遺跡がある。後者からは早期の遺物も発見され、三遺跡中最も古い。

出口遺跡のある「ふくらみ」は250mコンターを基底として、直徑160m程度の広さをもち、遺跡はその中央部よりやや東南寄りに存在している。この東南斜面に位置することは当然日射との関係を示すものである。

遺跡の南側に続く山ノ畑部落は多く南向きか東向きに建てられているが、これは年間を通じ北風の多く吹く地域性と併せ考えて先史時代の住居の入口を考える上にも重要である。



第2図 出口遺跡の地形と住居址の分布状態

本遺跡の成立年代は後述する如く、ほぼ縄文中期後葉といえるが、修善寺町内では同時期の遺跡が狩野川の河岸段丘上にも存在し、柏久保遺跡（標高70m）、本立野遺跡（同80m）、上大塚遺跡（同95m）のように100m以下の低所に分布している。したがって当時の水位が仮りに今日よりやや高かったとしても、柏久保遺跡等と出口遺跡の標高差は不変であるから、当然河岸低地集落と、丘陵山村集落が存在したわけで、このことは後者に属する出口遺跡の性格を考える上に重要である。

本遺跡の地質は基盤が火山灰の堆積した厚い赤褐色のローム質土壌で、その上に黒褐色の腐蝕土が、ところにより20~40cm堆積している。遺跡の構成要素をなす住居址は、この黒褐色腐蝕土層（表土）がある程度堆積していた時に作られたもので、その竪穴の床面はロームを10~30cm削って作られている。丘陵上には石塊がほとんどなく、住居址の炉や石器に用いられた石材は、多く南方を流れる大野川付近より採集されたものと思われ、石質は多く安山岩である。黒曜石の産地である伊東市と中伊豆町との境界にある冷川峠や、中伊豆町夜場にも比較的近く、狩猟用の石鏃等にも概して不自由しなかつたろう。遺跡の東北方から西方にかけては深い森林地帯をなし、当時は遺跡の周縁にも多くの鳥獣が棲息していたことであろう。

今日ではタバコ、甘藷、麦、とうもろこし等の栽培される畑地となつていますが、昨年（1963年）の暮より農地構造改善工事を起し、牧草と乳牛による酪農地域に転換されようとしている。

3. 調査の経過

本遺跡付近はかなり古くから、石器や土器の出土地として知られ、戦前には井出太一郎氏が踏査されて、「静岡県郷土研究」第8集に奥原遺跡として紹介されている。また同じ修善寺町内に住む長倉紫朗氏も、早くからこの地を訪れ、遺物を蒐集されると共に小池遺跡の名で呼んでいた。その範囲はいずれも沖原、出口、菅ヶ沢の三小字に及ぶものであつた。小野も又昭和36年中、長倉氏の案内で地元の相原隆三氏と共に、この地を検分したが、遺物を多く散布するのは字沖原の地域で、出口・菅ヶ沢の両地域は余り芳しくなかつた。結局沖原が主体をなすものと見て、他の二つは独立的遺跡としては認めないまま、さらに2年余を経過したのである。

しかし昨年の暮から始つた大野地区の農地構造改善工事により、この出口地域から独立した集落跡が発見されて、始めて別個の遺跡として取扱うことになつたのである。この集落跡発見の動機は、今年（1964年）正月元日にこの地を訪れた長倉紫朗氏が、ブルドーザーによつて、削り出された山肌より、石囲いの炉址や焼土を発見し、その付近より多くの石器や土器片を採集したことにはじまる。この地で工事の始まることは予知していた長倉氏であつたが、こんなに早く、しかも大規模に行われていたことは予想もしなかつたわけで、早速翌2日の夜、小野宅に電話連絡があつたのである。こうして3日の朝長倉氏と小野の現地踏査に基いて、正式調査の必要を生じ、同町内の尾形礼正氏の協力も求め、さらに小野から三島在住の長田に連絡し、緊急に調査実施の方針が打ち出されたわけである。

4日からの調査経過は次の通りである。

1月4日

朝9時半に修善寺駅に集合。緊急調査のため調査団の組織も十分できず、参加者は地元の長倉紫朗・尾形礼正両氏、それに日大の石谷宏一・内田敏明両君、武蔵工大の渡辺高文君、大仁高校の漆畑君以下生徒数名にすぎなかつた。調査の指揮は本日小野が担当することとし、2台の車に分乗して現地

に向つた。

10時半より調査開始。まず昨日確認した石囲いの炉をもつ住居址を第1号住居址とし、これより東方約35mの地点にある焼土のみの炉をもつ住居址を第2号住居址、さらにその東方15mほどのところにある同様の住居址を、第3号住居址として、調査に当ることにした。すでにブルドーザーにより表土を30~70cm削られているため、床面がある程度露出しており、調査は割合に楽である。しかし堅穴の側壁が削除されているところも多く、住居址のプランを完全に出し得ないのは残念である。両住居址共床面を追つて調査して行くと、土器片や石器類を次々に出土した。第1号址の方はすでに調査前に長倉紫朗氏により一部遺物が採集されていたが、今日も又柱穴から打製石斧が出たのを始め、多数の遺物が発見された。また第1号住居址の炉は方形に石で囲い、一部がブルドーザーで破損していたほかほぼ完全に近い状態で検出された。第2号址の方も本来石囲いの炉であつたが、一部は地主により耕作中に抜かれ、残部は今回の工事でブルドーザーにかかり、住居址内に散乱していた。

結局2住居址が本来は石囲いの炉があつたわけである。発見された土器片も縄文中期末に近い加曾利EⅡ式土器で、相互に共通した面がある。石器は第1号址より打製石斧、石棒、石鏃など、第2号址で磨石などが発見された。

第3号址からは柱穴2本が発見されたが、他は不明であつた。なお東側より一層低く、別個の炉址(焼土堆積)が発見され、土器も加曾利EⅠ式を出土して、3号址よりも古いことが判明した。

1月5日

午前10時10分、修善寺駅集合、長田以下14名が現地に向つた。

第1号、第2号両住居址の清掃を行ない、撮影実測を午前中に済ませた。

風には近くで活動中のブルドーザーに来て貰い、第1号、第2号両住居址の周縁を削り、表土の残部を剥ぎ取つて行つた。すると両住居址の南側から焼土や石囲いの炉址がいくつか発見された。しかし北側では皆無に等しかつた。とも角新発見の炉址を中心に住居址のプラン検出に努力し、まず第1号址西南方の第5号址に重点を置いて調査した。この住居址も石囲いの炉を持つものであつた。発掘の進行につれ、東壁に沿つてまた新しい住居址を発見、第6号址と命名した。これはもつばら加曾利EⅠ式土器を出土し、加曾利EⅡ式土器を出土する第5号址等よりもやや古く、規模も大きいものであつた。夕刻までに中央より南に寄つて石囲いの炉も検出された。しかしこの第6号址の西側に重なつて第7号址も発見され、調査の重要性を感じた。なお建設省勤務の山田繁治氏により、第9号址(7号址の西南約25m)の調査が行われた。

1月6日

正月中の事でもあり、長田・小野・尾形3名共他用があるため、一日中休みということにした。しかし長倉氏は現地の見廻りに行き、かなり多くの子供達により遺跡がつつかれているのを目撃した。新聞に報道されたためでもあろう。なお沼商生により長倉氏宅に1個の復原可能土器が届けられた。後に第12号址と命名された住居址のものであつた。

1月7日

朝10時半現地に集合。

今日は第5号、第6号、第7号各住居址の完掘に重点を置き、新しく参加した白石氏が第5号、尾形氏が第6号、小野が第7号を担当した。長田は全体の指揮をとりつつ第9号址の調査を行つた。第

7号址ではやや小規模な石囲いの竪を発見。第5号址では床面にささつた完形に近い2個の埋没土器と、磨石1個（一つの土器に伴出）、第7号址よりは石匙1個が出土した。第9号址よりはごく少量の土器片しか出土せず、時期の判定も難しかつた。竪には1個の石塊が見られたが、石囲いのあつたという積極的な証拠は見られなかつた。なお第7号と第9号の中間で発見されていた、焼土をもつ第8号住居址も調査した。しかしこれはブルドーザーによる破損著しく、遺物も少量で、どうやら加曾利EⅡ式土器を伴う住居址と推定された。このほか1号の北側から第11号住居址が発見された。

3時過ぎに3、4、5、6、7、9号の各住居址を清掃し、梯子を立てて俯瞰写真を撮影した。また第5号址は平面測量を終り、南北のセクションをとつたが、東西の分は翌日に繰越した。

この間渡辺君は全体測量を担当していたが一応の終了を見た。

本日の来訪者は修善寺町の教育委員長市川潔氏、同教育長三須完一郎氏、同町議土屋市平氏等で、有線放送の録音も行われた。

1月8日

10時より調査開始。今回は小野、長倉、尾形、石谷、内田の僅か5名による調査となつた。高校が始業式を迎えたためでもある。

第5、第6、第7、第9号各住居址の調査完了を目標に、石谷、内田両君は平板測量とセクション、長倉、尾形、小野は住居址の柱穴探しに全力を注いだ。いつになく冷く、調査の手も滞りがちであつたが、時には長倉氏提供の体内燃料（飲料）に力をつけられ、奮斗を続けた。結局第5住居址は柱穴が7本、第6住居址は6本、第7住居址も6本と判明した。しかし第6号址は床面に掘乱された部分が多く、各所に凹地ができるきらいがあり、調査は困難をきわめた。

第9号住居址からは6本の柱穴と、壁の一部が検出され、大体のプランが知られたが、第1号住居址ではどうしても柱穴が5本としか考えられなかつた。

3時すぎ第9号址の撮影と、西方溪文中腹の松の木上からの遺跡全景写真を撮影した。

1月9日

今日は小野も登校し、現地では尾形、内田、それに修善寺町役場の鈴木和慶氏の3名のみが調査に当つた。現地は非常に寒く、僅かながらも雪が積つていたとのこと。尾形氏らは各住居址の実測を行なつた。

1月10日

発掘調査は一先ず終了せざるを得なくなつたが、尾形氏より電話連絡があり、本日まで実測を続けたとの連絡があつた。なお遺物整理の件で相談したが、今後の処理について詳細な検討をするため12日（日曜）に小野が修善寺に行くことに決めた。

1月12日

午前10時、小野は約束通り尾形氏宅に到り、居合せた大仁高郷土研究部顧問、奇二先生とも相談して、もう1日調査をすることとし、15日（成人の日）に実施することになつた。その際にはまた大仁高郷土研究部の生徒諸君数名の御協力を願うことになつた。次いで尾形氏と共に長倉氏宅を訪れ、遺物整理の打合せをしたが、結局復原可能な土器は長倉氏と尾形氏に復原を依頼し、各住居址の時期決定に必要な他の土器片は小野が整理することになつた。また石器の実測は尾形氏が担当することになつた。

1月15日

小野、尾形、奇二、長倉の4名と共に、建設省の山田氏、大仁高の漆畑君、結局6名で調査を行うことになった。

今日は調査の出来ていなかった第11号址と、その北方の第12号址（新発見、但し6日に沼津生により土器が発見されていた）の調査を行った。11号址よりは2本、12号址からは2本の柱穴が確認された。また新たに第13号、第14号の両住居址を発見したが、第14号址からは柱穴1本と石鏃、小土器片（加曾利EⅡ式）が出土し、第13号は未調査に終わった。いずれもブルドーザーでローム層を削られ、床面上部を失つてはいいたが、斜（焼土）の底部が残っていたことから住居址と推定された。

第6号址の床面が腐蝕土とロームの混成層であり、中から遺物が出土する点、徹底的に追求することになり、混成層を除去して行くと、下層から6本柱の別の住居址が発見された。好もほぼ中央部から発見されたが石囲いはなく焼土や炭のみであつた。出土土器は加曾利EⅠ式土器で上層のものと同じであり、同時期に建て直しの行われたことが推定されるに至つた。それにしても従前の堅穴を埋め、いわゆる張り床をして建てたということは理解しにくい点でもある。最初は上層の方を6A、下層の方を6Bとしたが、やはり後者を通し番号で第15号址とすることにした。

このほか山田氏が清掃し直した9号址柱穴内よりは磨石1個が発見され、第12号址でも床面より磨石が出土した。

こうして悪条件下ながら、一応本遺跡の調査をほぼ終つたのであるが、第10、第13両住居址が調査不十分であつたことや、第11、第14の各住居址が実測できずに終つてしまつたことは、かえすがえすも残念であつた。しかし冬休みをほとんどこの応急調査に使い果したことや、毎日調査員を車で運搬され、昼食を提供された長倉氏、精一杯活動された尾形氏ほか調査員の方々の努力や、工事を一時中止された地元の方々の協力を思えば、失われかけた遺跡を記録するために最善の努力を払つた心算である。

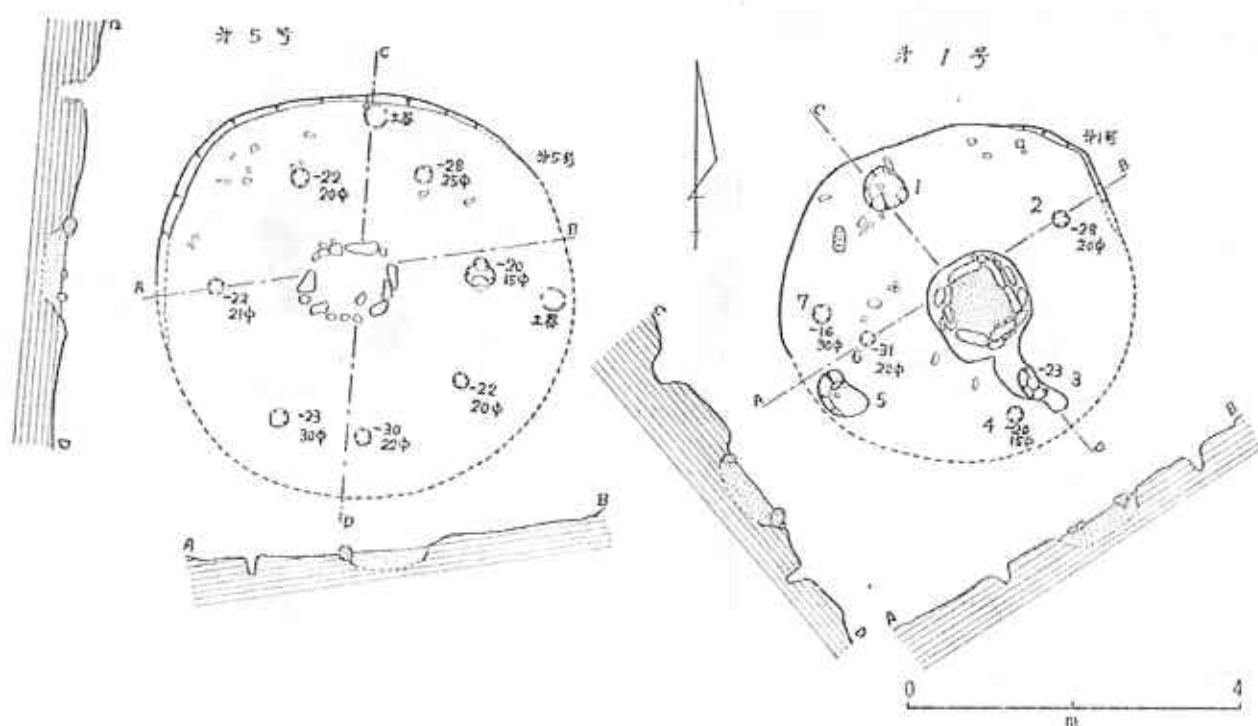
このあと1月末に長田、小野は長倉、尾形各氏と再調査を行い、残された住居址のレベル調査を尾形氏と沼津女子商業高校郷土研究部員2名の応援によつて実施した。

次に本調査に参加した人々の氏名を記しておく。

静岡県教育委員会社会教育課々長補佐	長 田 実
沼津女子商業高校教諭	小 野 貞 一
修善寺町文化財保護委員	長 倉 紫 朗
同	尾 形 礼 正
沼津女子商業高校教諭	白 石 竹 雄
大仁高校教諭	奇 二 浩 児
建設省職員	山 田 繁 治
日本大学考古学会々員	石 谷 徹 一
同	内 田 敏 明
武蔵野工業大学学生	渡 辺 高 文
国学院大学史学科学生	長 倉 範 子
大仁高校郷土研究部員	漆 畑 稔、安 藤 初 枝、坪 井 幸 子

それにしても全体で20戸分を越えることはあるまいと思われる。発見されたこれらの竪穴を、出土遺物の上から観察すると、現在の知見から考えて、二つの時期に分けることができるようである。その一つは加曾利EⅠ式土器を主体にやや勝坂式的特徴をもつ土器を含む一群の時期で、他の一つは加曾利EⅠ式的な手法をもつ土器を含みながらも、やや後出の加曾利EⅡ式土器を主体としている一群の時期である。後者には第1号址、第12号址のように加曾利EⅡ式土器の要素をもつ土器も伴出しているので、前者との編年関係は自ら明らかである。新に第3、第4両住居址の場合、加曾利EⅠ式土器を伴う第4号址が下層に、加曾利EⅡ式土器を伴う第3号址が上層になつて複合しているのは、その動かざる証拠である。これは第7住居址（加曾利EⅡ式）と、第6住居址（加曾利EⅠ式）の関係においても同様である。

こうした新旧二時期について、今回発見された16の住居址を分類してみると、確実な線では加曾利EⅠ式を主とする古いグループが4戸、加曾利EⅡ式を主とする新しいグループは10戸で、不明のものが2戸である。この不明のものは10号、13号で、いずれかと云えば、加曾利EⅠ式土器の小破片を若干出しており、他は見えないので、古いグループに属する公算が大である。新しいグループでも第16号住居址は床面が削られ、竪の発見がなかつたので住居址か否かが問題であるが、復原可能な埋没土器を2個出土したので、まず住居址と見てよいのではなかろうか。こう見てくると古いグループが多くて6、新しいグループが大体10ということになるが、実際には前者は若干多かつたかも知れない。それにしても数年、10数年ということになれば、建て直しもありうから、前記の家屋が同時に必ずあつたとは断言できないわけである。第6住居址と第15住居址の場合などはその一例で、両者共加曾利



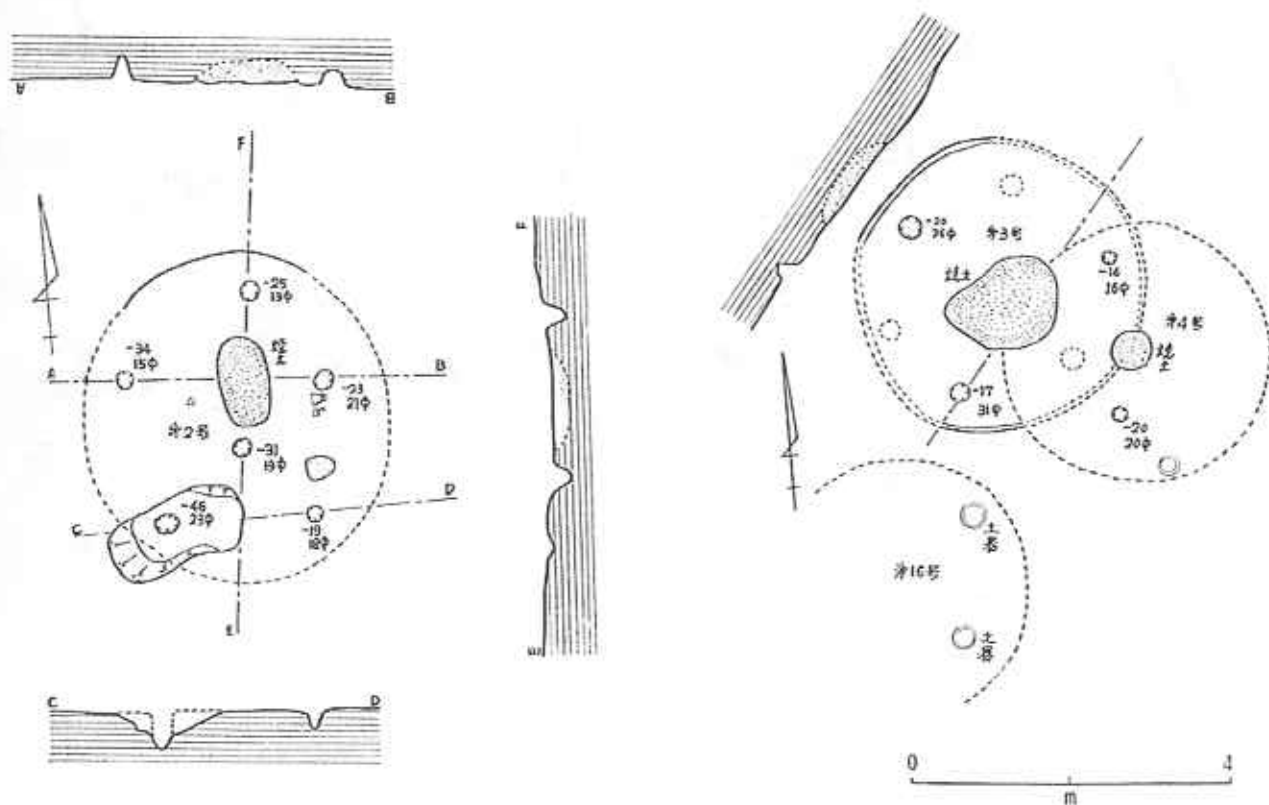
第4図 第1号住居址と第5号住居址実測図

EⅠ式土器をもつばら出土するが、層位的には前者が上、後者が下で重複している。結局同時に存在した住居の数は、そう多いものではなく、前述のような点を考慮に入れても、この集落の最盛期において、大体10軒程度の住居が存在したものと推定される。これらの住居址は第3図に見る如く、北方に口を開き馬蹄形の配置を示しており、中央に広場を有している点、興味深いものがある。古いグループは大体南側に直線状に並んでいるのであるから、前記のように馬蹄形を呈するに至つたのは新しいグループの時期になつてからといえるわけである。

(2) 住 居 址

個々の住居址についての概要は第1表に示す通りであるが、なお次に若干の説明を加えておこう。

第1号住居址 壁は西北側の半分が残っているのみで、東南側の半分は不明であつた。これは西北から東南の方向へ基盤のローム層が緩傾斜しているためで、おそらく上部の黒褐色土層中に壁があつたのであろう。西北側でローム層中の堅穴の深さは20cm、中央部に大きな炉があり、その形状は円形に近い。東西、南北共石囲いの外径で104cm、大小20余個の石塊で周囲を囲み、その中に中心の厚さ28cmにわたつて焼土や炭がつまつていた。石枠の内外には破損した加曾利EⅡ式土器の大形破片が石に密着して立て並べられている点特異であり、当住居址の成立年代を考える有力な資料となつている。また炉の石に混つて、東北側から欠損した石棒を発見した。柱穴は第4図に見る如く、確実と思われるものは北側の二つで、あとの大小5つのピットのうち、いずれが仲間か問題である。北側左と南側左は上部の径40cmを超えるやや大きな穴であるが、深さは北側右、南側(-20cm)の場合とつり合いがとれるようである。



第5図 第2、第3、第4、第16号住居址実測図

第1表 住居址の概要

住居址番号 事項	第1号	第2号	第3号	第4号	第5号	第6号	第7号	第8号	第9号	第10号	第11号	第12号	第13号	第14号	第15号	第16号
状 態	南半の壁不明	壁は北部一部のみ残る	壁は北と南の一部残る	柱と柱穴一部残存	壁は北部のみ残る	北半は壁残存	壁は北と南の一部残存	焼土のみ残存	残存	南北の壁一部残存	焼土のみ残存	壁は削除さる	壁はごく一部残る	柱穴と焼土残る	ほぼ完全に残る	全面削除
形	円形	円形	円形		円形	円形	円形		円形		円形	円形			円形	
大きさ(m)	径四・二	径四・一(推)	径三・六		径五・〇(推)	径五・二(推)	径四・四(推)		径五・二(推)		径五・三以上				径四・二	
柱穴数・形の種類	4(推) 石囲い	5 石囲い(破壊)	6(推) 焼土		7 石囲い	5 石囲い	6 石囲い		6 焼土		6(推) 焼土	6(推) 石囲い		6(推) 焼土	6 焼土	焼土
複合関係			4号址の上層	9号址より古い		15号址より新しい	6号址より新しい								6号址より古い	
時期(土器)	加曽利EⅠ式	加曽利EⅠ式	加曽利EⅠ式	加曽利EⅠ式	加曽利EⅠ式	加曽利EⅠ式	加曽利EⅠ式(推)	加曽利EⅠ式	加曽利EⅠ式	加曽利EⅠ式	加曽利EⅠ式	加曽利EⅠ式	加曽利EⅠ式(推)	加曽利EⅠ式	加曽利EⅠ式	加曽利EⅠ式
レベル差(cm)	マイナス六〇	マイナス一五八	マイナス二四〇	マイナス二四八	マイナス一一〇	マイナス一一三	マイナス一二六	マイナス一四九	マイナス二三九	マイナス二一六	マイナス〇	マイナス五四	マイナス四〇	マイナス一九九	マイナス二四〇	マイナス 不明
出土遺物	打製石斧、磨製石斧、石鏃、土器片	磨石、土器	土器片	土器	打製石斧、磨製石斧、石鏃、磨石、土器	打製石斧、石鏃、磨石、土器片	石鏃、土器	土器片	磨石、土器片	土器片		土器 石皿、磨石	土器片	石鏃、土器片	土器片	土器
備考					埋没土器二個あり	15号址の柱穴上に加石あり 北壁に棚状張り出しあり	加は二個並列									住居址と推定さる 埋没土器二個あり

(平均24cm)。これを柱穴と考えれば1、2、4、5の4本柱が考えられる。しかしこの場合は二つの大きな穴の説明に困ることになる。1からは土器片と磨製石斧、5からは打製石斧を出している。柱の廻りを何かの事情で掘ったのであろうか。石斧は土掘具として使用したことが考えられる。次に3、6も深さが23cm、31cmで適当であるから、これを生かせば1、2、3、6の4本柱がやはり考えられる。けれどもこれでは柱間の形がやや「いびつ」になるきらいがある。そこで今度は7を生かし4と5の間に未発見の柱穴(8と仮定)があるとすれば、1、2、3、8、7の5本柱が考えられる。しかし8とすべき柱穴の存在は承認し難いので、結局は前二者のいずれかで、4本柱と推定するのが妥当ではなかろうか。

出土遺物は打製石斧4、磨製石斧2、石棒1、石鏃4、土器片多数である。

第2号住居址 1号址の東方の約30mの地点にあり、長径(南北)4m前後、短径(東西)3.8m前後と推定され、1号址よりやや小さい。北側の壁残存部で堅穴の深さは12cm。中央部よりやや北寄りに大きな竈があり、本来石囲いがあつたが地主が耕作の邪魔で取り除いたという。なお、取り残しの石が数個残っていたが、ブルドーザーにかかつて移動し、付近に散乱していた。竈中の焼土の厚さは約24cm。柱穴は5本であるが、中心よりやや南寄り(竈の南側)にも1本あり、中柱があつたのかも知れない。外周5本柱の柱穴は深さが平均29cmである。

出土遺物は磨石1個と土器片(加曾利EⅡ式)若干。

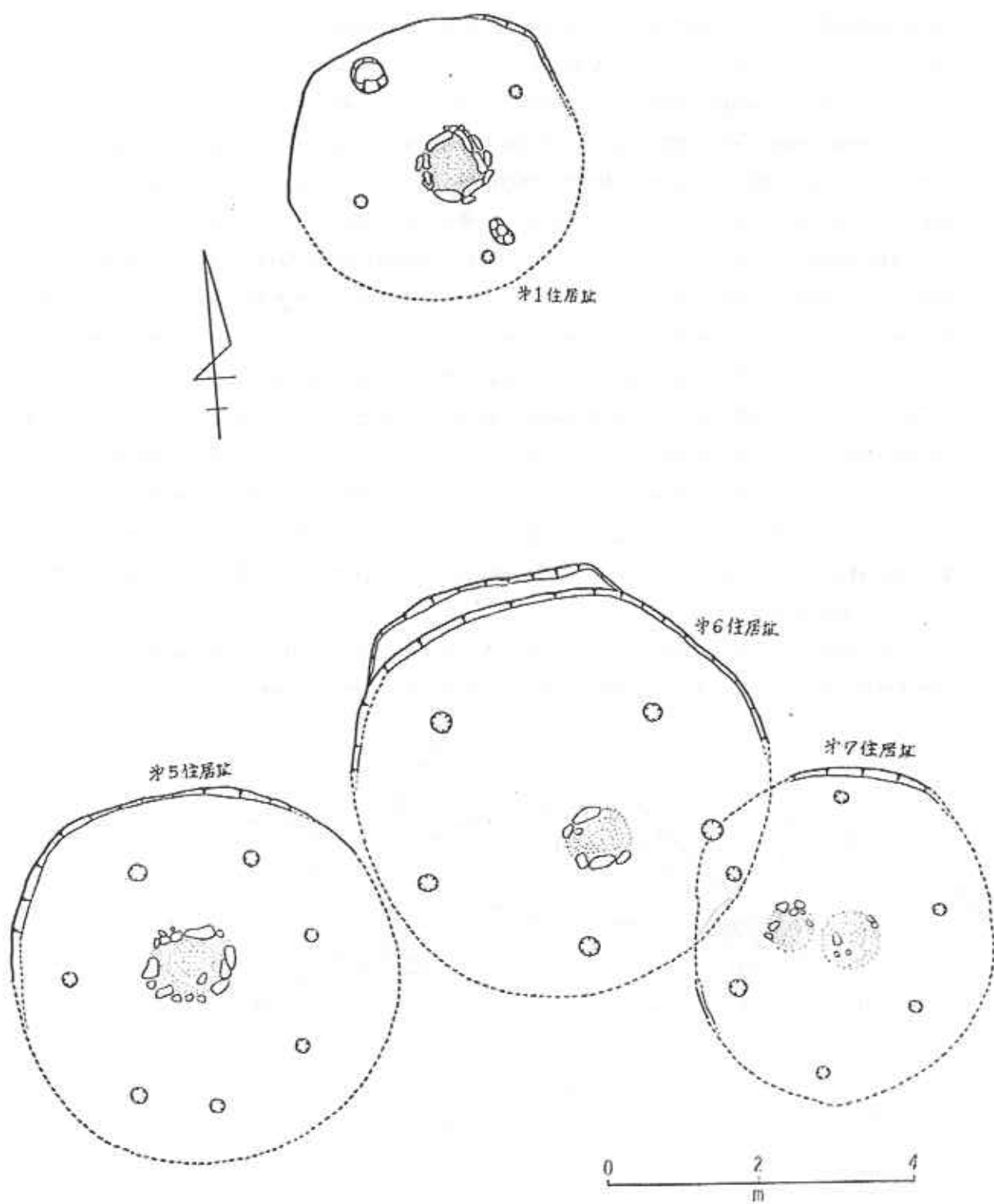
第3号住居址 2号址より14m東北方にあり、壁は北と南の一部が残存していた。南北の径は3.6mで、ほぼ正円に近い形をしていたものと思われる。堅穴の深さは現存部で8cm。これは壁の上部をブルドーザーで削除されたためである。竈は石囲いがなく1.2m位の円形焼土が拡がっていた。断面から見ると竈の大きさはやはり外径1m余で、中心における焼土の厚みは28cmであつた。柱穴は2本発見され、平均の深さは29cm、十分な調査ができなかつたが、この2本の柱穴から推定すると、多分6本柱であつたと思われる。

土器片少量を出土したが、すべて加曾利EⅡ式である。

第4号住居址 3号址の東南部にはほぼ半分が重なつて存在し、下層に位置している。床面のレベル差は大体7cm前後。壁は全く失われていたが、柱穴が2本発見された。共に3号址のものより細く浅いことが目立つ。第3号住居址の南壁残部の東端が、この第4住居址の西南端と思われるので、この点と竈の中心を通る直線上に、対象的に東北端の点を求めると、この住居址の径は大体3.4m位になるようである。

出土した遺物は加曾利EⅠ式土器数片のみ。

第5号住居址 1号址より中心距離で約10m西南に存在し、ほぼ満足に近い状態で発掘された。基盤のローム層が南へ向つて傾斜するため、南半分の壁がやはり確認できなかつた。堅穴の深さはローム層のみで15cm(北壁寄)。径はほぼ5mの正円に近い形と推定される。柱穴は7本で、その平均値は直径24cm、深さ22cmである。堅穴の中心に石囲いの竈があり、南北80cm、東西88cmの内径を有している。壁の北端と東端にそれぞれ埋設土器があり、いずれも完形土器であつたが、東端のものは上部をブルドーザーで削除され、残部も破損著しかつた。これらの土器はその大きさに合うように床面を掘り、口縁部を上にしてびつたりと埋設していた。このような事例は当時期の遺跡でしばしば見られる現象である。形式は加曾利EⅠ式の特徴を有するが、他の土器片の大半は加曾利EⅡ式に相当するも



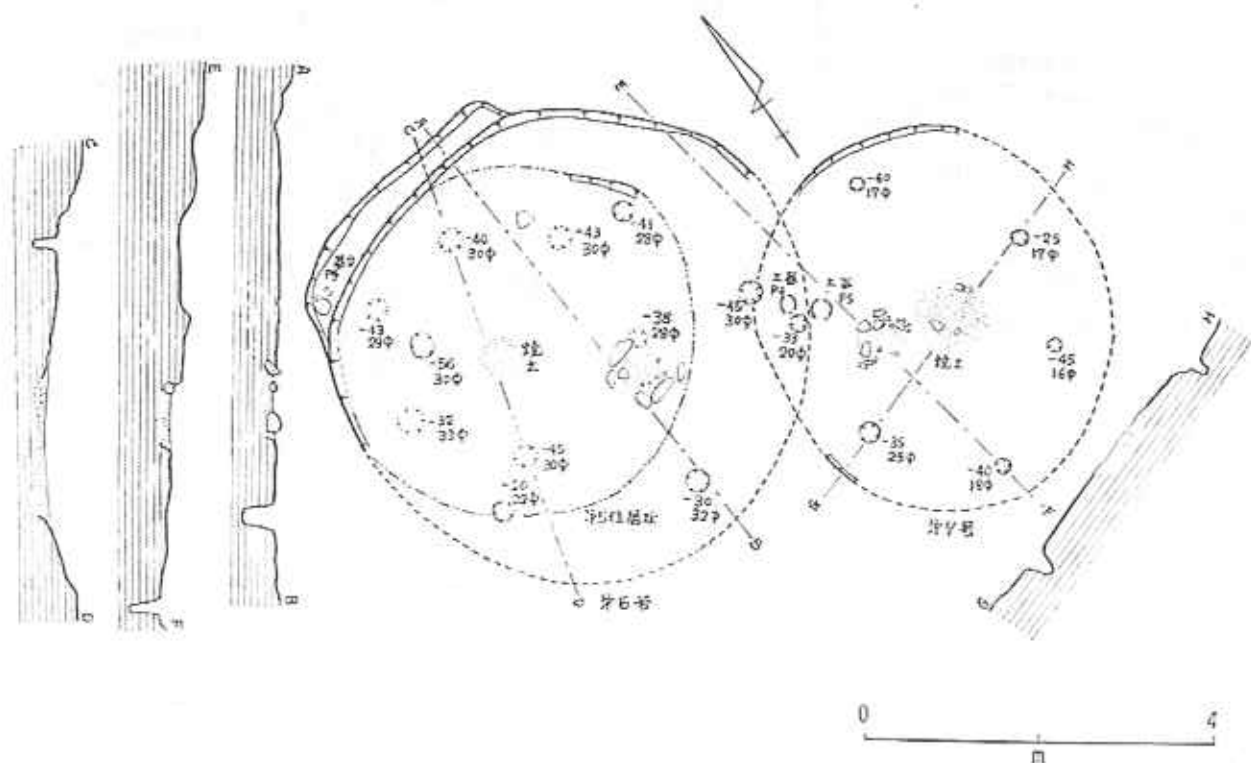
第6図 第1、5、6、7号住居址の平面的関係

のであり、時期の主体は後者におくことができよう。

出土遺物は打製石斧7、磨製石斧(残欠)1、石鐮1、石棒残欠1、磨石(小型)1、復原可能土器2。

第6号住居址 5号址の発掘中にその東北隣より発見され、壁面を追っているうちに、直径5.4mと推定されるやや大きな円形のプランを得たわけである。この場合も北半のみで、南半はブルトーンによって削られたため壁線を知ることは不可能であつた。しかし基盤に残っていた柱穴の位置より推して、相対的にそのプランを推知することは可能である。壁穴の深さはローム層のみで20cm。柱穴は5本で平均値は直径28.6cm、深さ38.4cmで、やや巾広く深いものである。柱は石間であるが壁穴の中央部よりかなり南に偏在している。東側には石塊が発見されなかつたが、このような例は他にもあり、あるいは住居の入口が東側にあつたことを示す一証かも知れない。南北の柱間は内径で48cmである。炉内をはじめ床面より発見される土器片は、すべて加曾利EⅠ式土器であり、近接する第1、第5、第7各住居址よりも、古い時期のものである。またこの住居址の大きな特徴として、北側に板状の細長い張り出しがあり、その西側に勝坂式土器の面影を残すような文様手法をもつ、台付土器の台部が残存していた。棚と台付土器という特殊な組み合わせは、住居の北側という位置とも考え合せ、何か重要な意味を持つているように思われる。この棚はレベルで調べると、ローム上面より13cm切込んで存在し、さらに住居の床面とは10cm上つている。但し当住居址は壁側はやや深く、中央部に向つて床がやや上昇しているので、住居の中心部との対比では7cmしか上つていないことになる。他の住居址には全く見られないこの板状の張り出しの存在は、あるいは、この時期のこの集落の首長または司祭者の住居とも疑われるのである。

住居の西南部に2ヶ所大きなピットがあるが、その底から当住居址の柱穴残部が発見されたり、また加曾利EⅠ式と加曾利EⅡ式の土器片が混在して発見された点など、後世の掘穿によるものと推定



第7図 第6、第7、第15号住居址複合状況実測図

される。なおこの2形式の土器の混在という現象は、この西南部が加曾利EⅡ式期の第7住居址と、重複する位置にあるため生じたものと思われる。

さらに検討を加えると、この住居址は炉の附近を除き、完全なローム面が見当らず、床面の大半はローム質土壌を主としながらも、暗褐色土壌を若干含む状態にあつた。そこでこれを剥きとつて見ると、下から全く別個の、しかもやや小さな竪穴住居址が発見されたわけである。これが第15号住居址で、時間的に先行することは証明(15号址参証)されたが、土器形式がほとんど同一の点、同じ加曾利EⅠ式期に第6号址が立て直されたものと一応推定される。

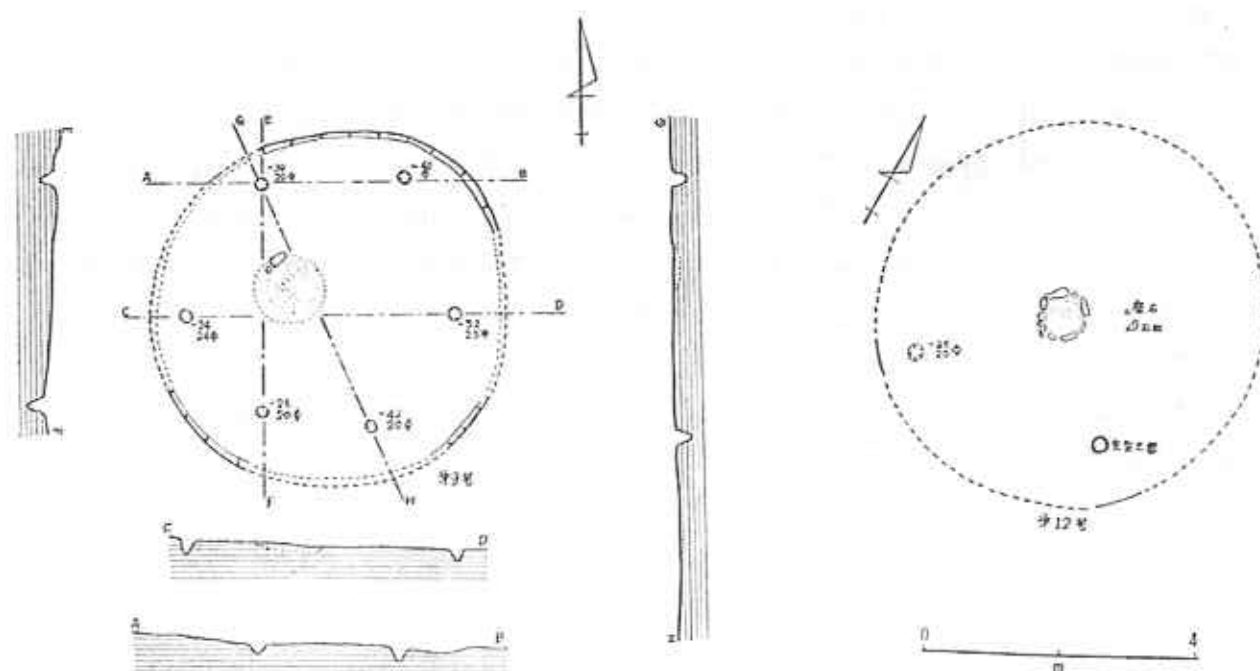
第6号址よりの出土遺物は、打製石斧4、磨石1、土器片多数である。

第7号住居址 6号址の西南部に一部が重なつて存在し、北部と西部に壁の一部が残存するので、これと6本の柱穴を参考にして、プランを復原すると、南北4.4m、東西3.8mでやや楕円形になるようである。北側の壁でロームの切り込みは12cm。

炉は竪穴のはほぼ中央部にあるが、東西に二つ並んで発見され、西側のものはやや多くの石塊により焼土が囲まれていたが、東側のものは石塊が若干少なく、焼土は外方へ拡がっていた。当初は西側ののみが発見され、そのまま住居址全体の写真撮影が行われたが、その後東側の炉が床面をやや剥いた時に発見され、注目されたわけである。結局東側の炉の方が先行するよに思われるが、二つの炉内より発見された土器片はいずれも加曾利EⅡ式であり、おそらく東側のものが最初作られたが、やがて新しい炉が作られたために埋没されたものと思われる。この場合東側の炉の方が竪穴のはほぼ中心にあり、西がやや西に偏在している点、おそらく住居の入口が東側にあつたために、出入の都合も考えて西へ移されたものとも解せられる。6本の柱穴の平均値は直径20.5cm、深さ39.6cmである。

北西隅より、口縁部のみ残した2個の土器が発見された他、大小の破片が床面に残存していた。石器は横型の石匙1個が北側の6号址寄りで見つかったのみである。

第8号住居址 7号址から東方へ15m近く離れて存在し、ブルドーザーによりほとんど破壊されて



第8図 第9、第12号住居址実測図

しまった。炉は焼土のみで石囲いはなく床面も厚く剥がれてしまったため、壁や遺物の調査は不可能に近かった。一応柱穴の調査を予定したが、結局調査期間が短かったため手が届かず、残念ながら見捨ててしまったものであるが、炉の存在状況からみて、住居址であることは間違いない。ブルドーザーによる削土や、炉辺から採集された若干の土器は、いずれも加曾利EⅠ式土器で、黒曜石の破片も散乱していた。

第9号住居址 8号址の東南10mの地点にあり、建設省の山田繁治氏が発見し、その後長田、小野等により発掘されたもので、壁は北側の大半と、東南側の一部が検出された。上部が削られており、ロームの切り込みは残存部で8cmあつた。炉はやはり中心より西偏しており、西北隅に石塊2個が存在したが、他には存在した形跡もなく、厚く焼土の堆積しているものが特徴であつた。その規模は直径1m強、厚さ28cmであつた。床面の広さは径5.2mの正円に近く、本遺跡ではやや大きな部類に属するものである。

柱穴は6本で、その平均値は直径23.6cm、深さ18cmである。

出土遺物は磨石1（柱穴内出土）、石鏃1、土器片若干、土器片は加曾利EⅠ式的様相をもつものもあるが、主体は加曾利EⅡ式土器のようである。

第10号住居址 第8号址の西北8mのところであり、第8号址同様ブルドーザーによる破損著しく、僅かに炉址と柱穴2個を認めたのみ。十分な調査はできなかつたが、炉は石囲いのものでなく、出土遺物は加曾利EⅠ式土器若干。

第11号住居址 第1号址の北方10m余の地点にあり、当集落址の中では最も高い位置に存在している。やはりブルドーザーにより壁はもとより床面まで削られ、炉址と柱穴4本を知り得たのみ。しかし調査された柱穴の配置から見ると6本柱であることは間違いなく、堅穴の形態は東西にやや長い楕円形と推定される。その長径は5.9mを下らないものであろう。柱穴の平均値は残存部において、直径22.8cm、深さ20.2cm。炉址は中央よりやや北寄り、焼土のみ。南北76cm、東西84cmの楕円形。出土遺物は土器片のみ（加曾利EⅡ式）。

第12号住居址 11号址の北西16mの地点にあり、発見が遅かつたため完全な調査はできなかつた。しかし石囲いによる炉址と、柱穴1本を検出し、さらに南部で壁の残存部と思われるものを1点認めたので、これより推定される住居の大きさは、やはり5m以上の径を有するものと思われる。炉は直径75cmのほぼ円形に近いもので、焼土や炭化物が入っていた。柱穴は直径20cm、深さ25cm。

床面より多くの土器片や黒曜石片が出土したが、特に炉の東側から磨石と石皿のそれぞれ残欠品が1点ずつ、また南壁近くから完形土器1個体分が発見された。時期は加曾利EⅡ式、但し加曾利EⅠ式的手法をもつ土器片も若干出土。

第13号住居址 第10号址の約11m東方に位置し、これもブルドーザーによりほとんど失われ、炉の下部が僅かに残存していた。この住居址の北辺に1本の樹木が残存していたが、その地点のみ工事前の表土が残っており、計測すると、表面からローム層までの黒褐色土層（表土）が40cm、さらにローム上面から当住居址の炉の下底部までがやはり40cm。つまり80cmも削除されていたわけである。焼土の厚みが10cm位あつたとしても、当住居址の床面は地表から70cmのところ、1号、5号、6号、7号などの西方住居址群に比べ、やや表土の堆積率が大きであつたようである。

出土遺物はこの樹木付近から得られた少量の土器片で、加曾利EⅠ式土器片のみである。

第14号住居址 3号址の北方14mのところであり、これも上面を削除されて、僅かに炉址の下部と柱穴2本を得たのみ。壁も西側の一部が一応認められたが、これらより推定する堅穴の径は4.5m以上である。柱穴の平均値は上径20cm、深さ18cm。

出土遺物は加曾利EⅡ式土器片少量と、黒燐石片、石鏃1個（石英質）である。

第15号住居址 既述した如く第6号址の下部から発見され、そのレベル差は27cmである。石囲いのない焼土の詰った小さな炉を中心に、円形を描いて6本柱があり、その1本は6号址の炉石を除去した下から発見された。したがって当住居址が6号址よりも古いことは明らかである。西北部の壁面が6号址のものにはほぼ一致しており、東北部の壁は一部6号址内より発見されているので、規模は6号址よりもずっと小さい。推定では東西4.4mで、ほぼ正円に近いものと思われる。柱穴の平均値は上径30.1cm、深さ40.1cmで、第6住居址同様、加曾利EⅠ式期の住居址は平均して柱穴が大きい。（4号8号、10号、13号、等は床面削除のため正数値不明）。

出土遺物は加曾利EⅠ式土器片が多量で、他はない。

第16号住居址 これは確実に住居址と断定できるものではないが、九分通り存在が間違いないと思われるものである。第3号址の直ぐ西南隣に位置し、復元可能な埋没土器2点を出土している。本遺跡の発見当初長倉氏により掘り出されたもので、やはり地中にピッタリ埋没していたものである。周縁の調査が十分でなかつたが、5号址の例から見ても住居址の存在したことは間違いないだろう。ブルドーザーによる削除著しく炉址等も失われたものと思われる。土器は加曾利EⅡ式。

5. 出土遺物

本遺跡よりの出土遺物は、石器と土器のみであるが、その数量は比較的多い。前項でも住居址別に出土遺物を掲げたが、ここではその種別にさらに詳細に観察して見たい。

一 石 器

石器としては打製石斧23、磨製石斧5、石匙1、石鏃12、磨石4、凹石1、石棒2、石皿5の合計59点である。このうち住居址内から確実に出土したもの36点、表面採集によるもの17点である。

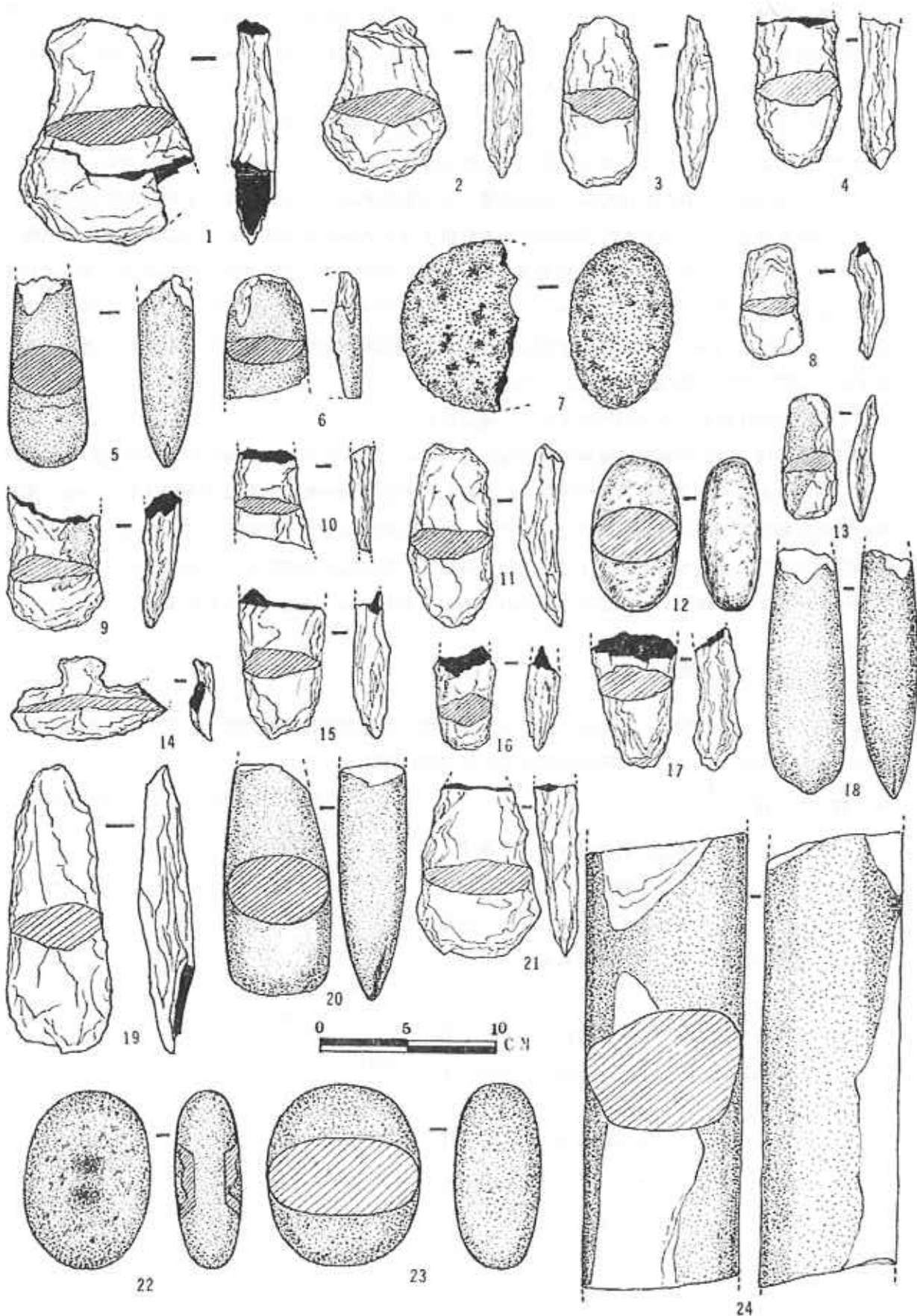
イ、打製石斧

23点のうち第9図に紹介したものは14点であるが、すべて安山岩である。この点は図示されないものにも共通している。1～4は第1住居址内より出土し、そのうち1は炉脇、2は柱穴内、3、4は床面より発見されている。1は分洞形であるが頭部が欠け、2は撥形、3、4は短冊形である。

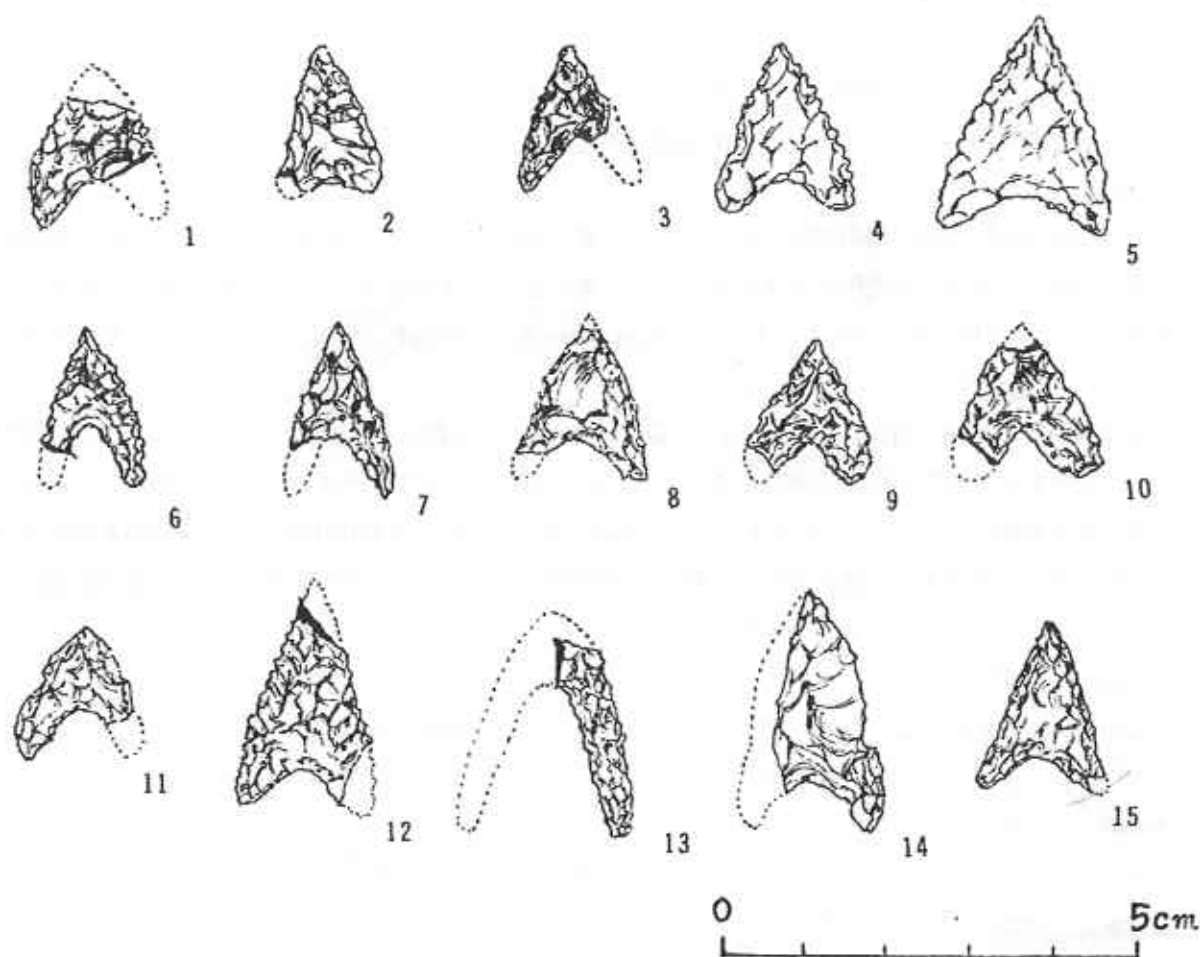
8～11は第5住居址出土で、すべて床面の南部から出土している。10は撥形とも思われるが、他は大體短冊形に属するものである。9は半分、10は上下

第2表 各住居址別出土遺物一覧表

住居址	打製石斧	磨製石斧	石匙	石鏃	磨石	凹石	石棒	石皿	復元土器
1号址	4	2		4			1		
2号址									
4号址									1
5号址	7	1		1	1		1		2
6号址	7				1				
7号址			1						
9号址				1	1				
12号址					1			1	1
14号址				1					
16号址									1
表面採集	5	2		5		1		4	
合 計	23	5	1	12	4	1	2	5	5



第9圖 出口遺跡出土石器実測図



第10図 出口遺跡出土石鏃実測図

1～3、5～10 表面採集 4 第14住居址出土 11、12 第6住居址出土 13～15第5住居址出土
(注、表面採集品中には第1住居址出土のものも含む)

端共に欠いている。

13、15～17は第6住居址内から出土し、17を除きほとんどピット内より出土している。このピットは後世に掘込んだものと思われるので、3本全部がこの住居址のものとは確実に云えないかも知れない。13、16はやや小形であり、13は表面が黄褐色の被膜に被われた黒青色緻密な安山岩で、当地方に多く見られる特徴的な石材から成っている。他にもこの種の石質のものが比較的多い。14の石匙も同質のものである。15～17はみな半欠である。(17は天地逆である)

19、21は表面採集によるものであるが、いずれもやや大型のものである。19は短冊形の完型品、21は楕形の上半欠のものである。

総じて本遺址出土打製石斧の種類は、短冊形のものが一番多く、楕形がこれに次ぎ、分胴型は少ないことが分る。

ロ、磨製石斧

5点出土しているが、5、6、18が安山岩質、20はプロピライト(変朽安山岩、粒状安山岩)と思われるものである。5、6の2点が第1号住居址出土、18、20が表面採集によるものであるが、他に第5号址より頭部の残欠品が1個出土している。5は柱穴、6は炉内よりの出土。

このほか地元の農家に保存されているものの中に、蛇紋岩質の定角石斧1個がある。

ハ、石 匙

第7号址より出土した横型のもの1個があり、14がそれである。石質は13の石斧と同一のもの。総じて本遺跡発見石器のうち、この石匙が1点(第10図)というのは、いささか不思議でもある。

ニ、石 鏝

これは従来から長倉氏等の採集されているもの等を加えると、かなり多量に上るものであり、石錘の皆無と対比して本遺跡居住民の生業を考えるに重要である。第10図はそのうちの15点を示したものであるが、大半が黒曜石製で、4のみはチャート質のものである。無柄で二股になつたものが一般的である。

ホ、磨 石

第9図7は熔岩を材料にしたもので、一部欠損しているが肉厚のもので、第2号址の出土。12は白い珪晶のある普通輝石安山岩を材料としたものと思われる。両端が叩かれたらしく磨滅している。小型であり普通の磨石とはやや異なるので、あるいは叩石の一種か知れない。これは第6住居址から、第19図2の土器と共に発見された。23は表面採集品であるが、一般的に見る安山岩製(材質は12と同じ)のもので、周囲がよく磨かれている。

ヘ、凹 石

表面採集品1個があるのみで、第9図22がそれである。普通輝石安山岩が材料のようであり、白い珪晶を有している。表裏に二つずつ凹みを有している。

ト、石 棒

第1住居址と第5住居址の輝石群の中からそれぞれ1個が発見された。いずれも上下を失した残欠品であり、廃品として炉の石囲いに用いられたものである。石棒の一部が廃品として炉の囲み石に利用されることは多い。伊東市仏現寺遺跡にも見られる。いずれも炉の東北部に存在していた。輝石安山岩製で太形のものである。第9図24は第1住居址出土のもの。

チ、石 皿

第11図3は第9号住居址出土のものであるが、他は表面採集によるものである。1は安山岩質熔岩から成り、4は普通輝石安山岩製でいずれも片面のみの使用。2は両面使用で角閃安山岩製。四者共に残欠品である。

二 土 器

本遺跡より出土した土器はすべて縄文中期後半のもので、加曾利EⅠ式土器と加曾利EⅡ式土器に相当するものである。後者には加曾利EⅢ式的要素をもつたもの若干が伴出しているが、分離する積極的理由は見当らない。なおこの加曾利EⅢ式土器の存在自体についても、その主体地域である南関東において確定的なものではないので、当地方でもその取扱いについては慎重な態度が必要であろう。ただ当地方においては沼津市鳥谷大芝原・吉原市境上ノ段等の発掘を通じて従来加曾利E式併行と考えられていたものが、三形式に分類できる可能性が強くなつており、それがいずれも当地方(駿河湾地方)のローカル性を具備しているので、小野は仮りに大芝原Ⅰ式、大芝原Ⅱ式、大芝原Ⅲ式として捉えたことがある。^(註1)

したがって本遺跡出土土器の場合も加曾利EⅠ式併行のものは当地方で大芝原Ⅰ式、加曾利EⅡ式併行のものは大芝原Ⅱ式と仮称したものの特徴を持つていっているわけである。そして後者には大芝原Ⅲ式

に至つて盛行する文様の特徴を備えた土器が若干伴出しているというわけである。次にその概要について観察してみよう。

イ、加曾利EⅠ式併行土器（出口Ⅰ式）

この形式に該当する土器は、第4、第6、第8、第10、第13、第15の6住居址から出土しており、第1、第5住居址等からも近似したものが若干出土している。しかしこの近似したものの中には、古いものがまぎれ込んだと思われるものもあり（第1住居址の場合）、また古い形式が完全に消滅することなく、一部残存したと思われるものもある（第5、第9、第16各住居址）。あるいは第1住居址の場合も同じ残象（残存現象）であるかも知れない。

標式的な加曾利EⅠ式併行の土器は、挿図の12、13、14並びに図版10上段に見るものである。この土器の特徴は胴長の壺形土器を普通とし、口辺部が大きく外方へ開いてから、口縁が内曲する、いわゆるキヤリバー形をなすのが一般的である。第12図4、12、18、第13図13、第14図6などはその口縁部破片である。文様は半截竹管文や櫛歯文または斜行縄文を地文とし、その上に粘土紐をはりつけた隆起文が、曲線、波状、渦巻などの種々に変化して施文されている。第12図1～4、第13図10、11、第14図8～10、12などは半截竹管文の例であり、口縁部や胴上部に多く見られる。第12図5～9、第13図1～3、第14図7、13などは櫛歯文の例で、胴部に縦に施文された鋭い平行沈線文である。中には第12図10のようなやや軟か味のあるものもある。斜行縄文の例は第12図13～15、21、第13図9などで、左傾のものと右傾のものが相半ばしている。粘土紐による隆起文はこれら地文の上に見られるが、第12図8、9、第13図9、第14図14、15のような波状文、第12図7、14、第13図3、7のような波状懸垂文、第12図14のような直線懸垂文、第12図17、第15図1などのような渦巻文がある。他に第12図15、第13図5のような不規則な曲線文があり、また第12図18の口縁内曲部に見られる沈線渦巻文、第14図18に見る連珠文など様々なものがある。これらの隆起文はいずれも同一個体に併用されているのが普通である。

口縁装飾には第12図12、第13図4、第14図6など器面を彫り込んで、平行な直線、曲線を表現したものが多く、中には第18図16のように口縁部のこの種の文様の上に、直交する粘土紐を平行に並べて籠目状にしたものもある。第12図12、第13図4のように口縁が彫刻による平行曲線の波で被われ、その上に頭の大きな隆起懸垂文がつくのは駿豆地方の大きな特徴で、これが大芝原Ⅰ式の指標でもある。この種の土器には口縁部と胴部の境に、やはり彫刻的手法による平行曲線文のある把手がつく場合が多く、本遺跡でも第6住居址等から出土している。

なお口縁部には無文のものもあり、斜行縄文で充填したものもある。底部は無文のものが多いが、第12図20のように木葉底のものもある。

第13図1はこの類の土器のうちある程度復原できたもので、第4住居址の出土である。

ロ、加曾利EⅡ式併行土器（出口Ⅱ式）

この種の土器は第1、第2、第3、第5、第7、第9、第11、第12、第14、第16の各住居址より出土しているが、細かに観察すると、次の3つに大別される。

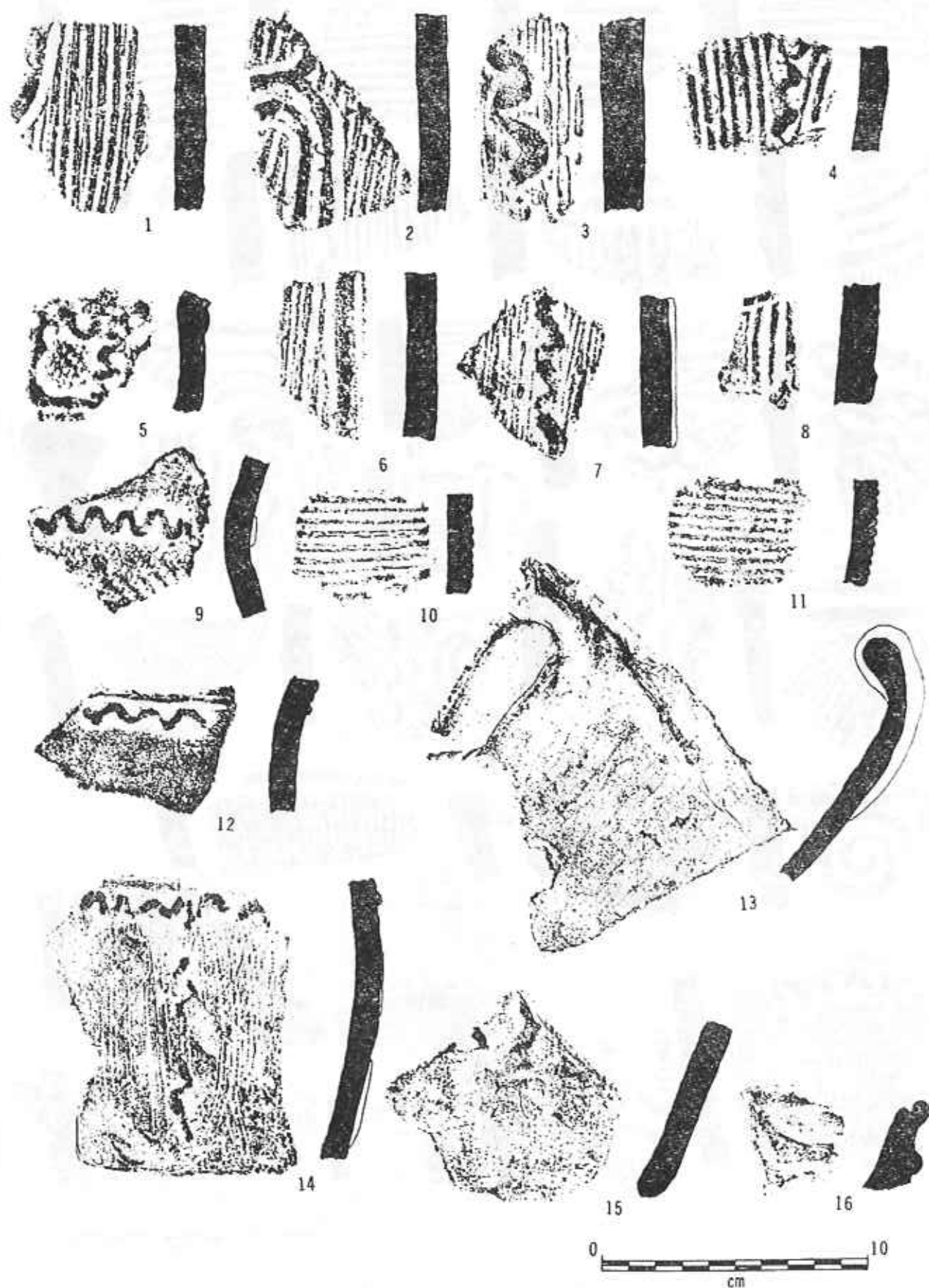
ⅴ 笹竹を割つて施文したような竹管文を主とした文様構成をとるもの、およびキヤリバー型器形を有するもの一般（第1種）



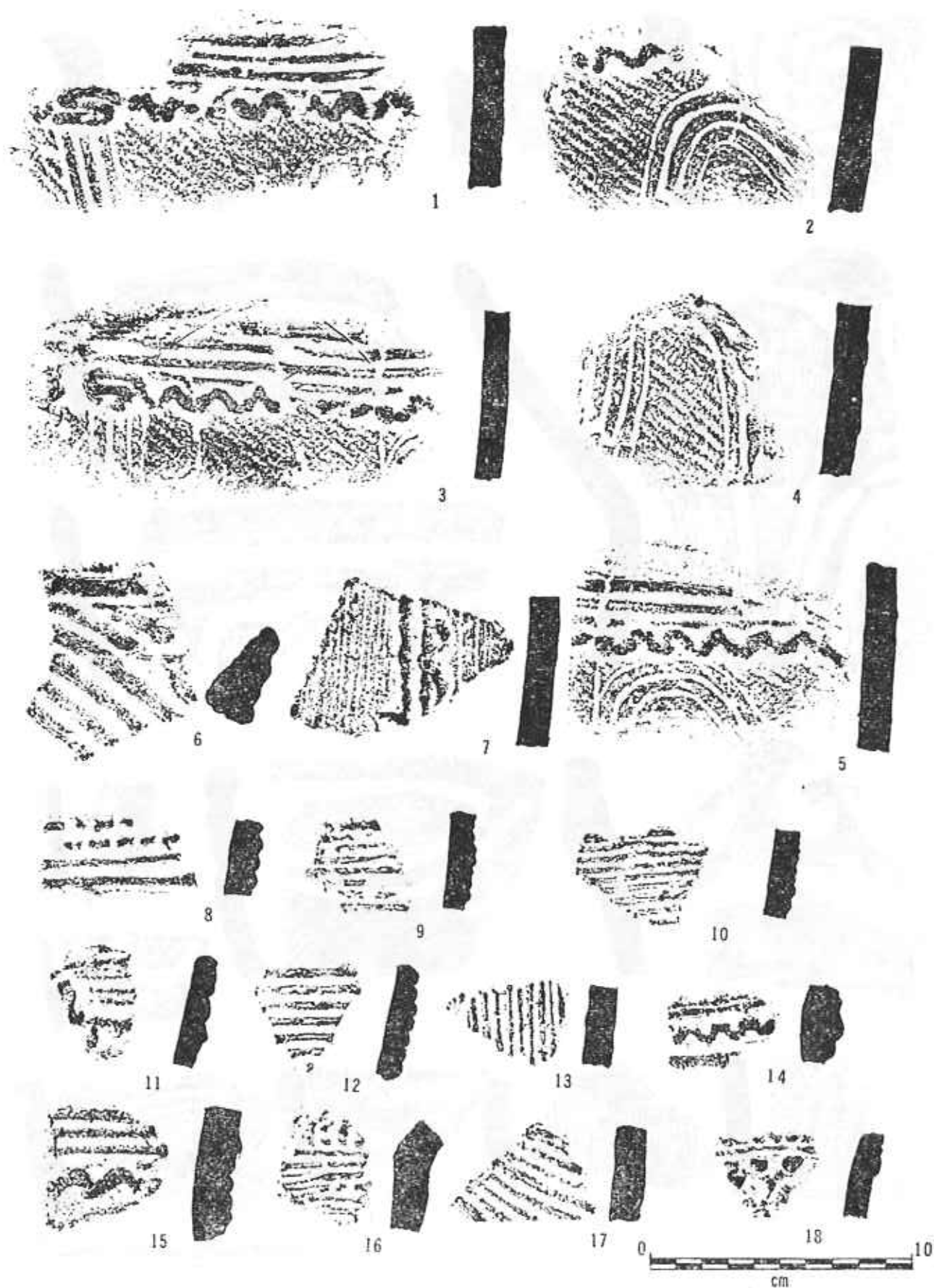
第11図 出口遺跡出土石皿夾測図
3、第9号住居址、他は表面採集



第12図 第6号住居址出土土器拓影



第13图 第15号住居址出土土器拓影

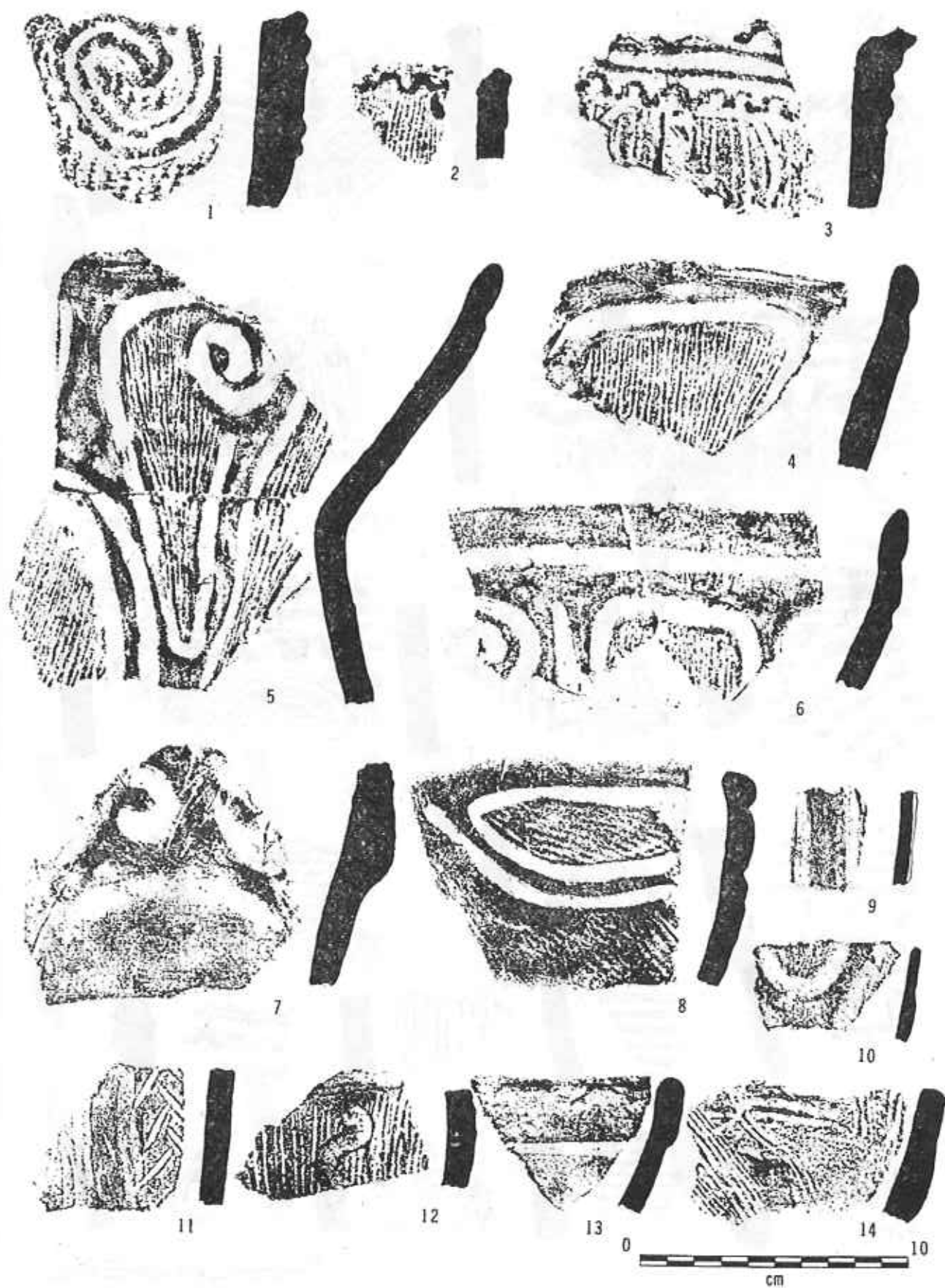


第14圖 第16、第4、第8、第10、第13号住居址出土土器拓影

1~5 第16住居址出土
11~14 第10住居址出土

6、7 第4住居址出土
15~18 第13住居址出土

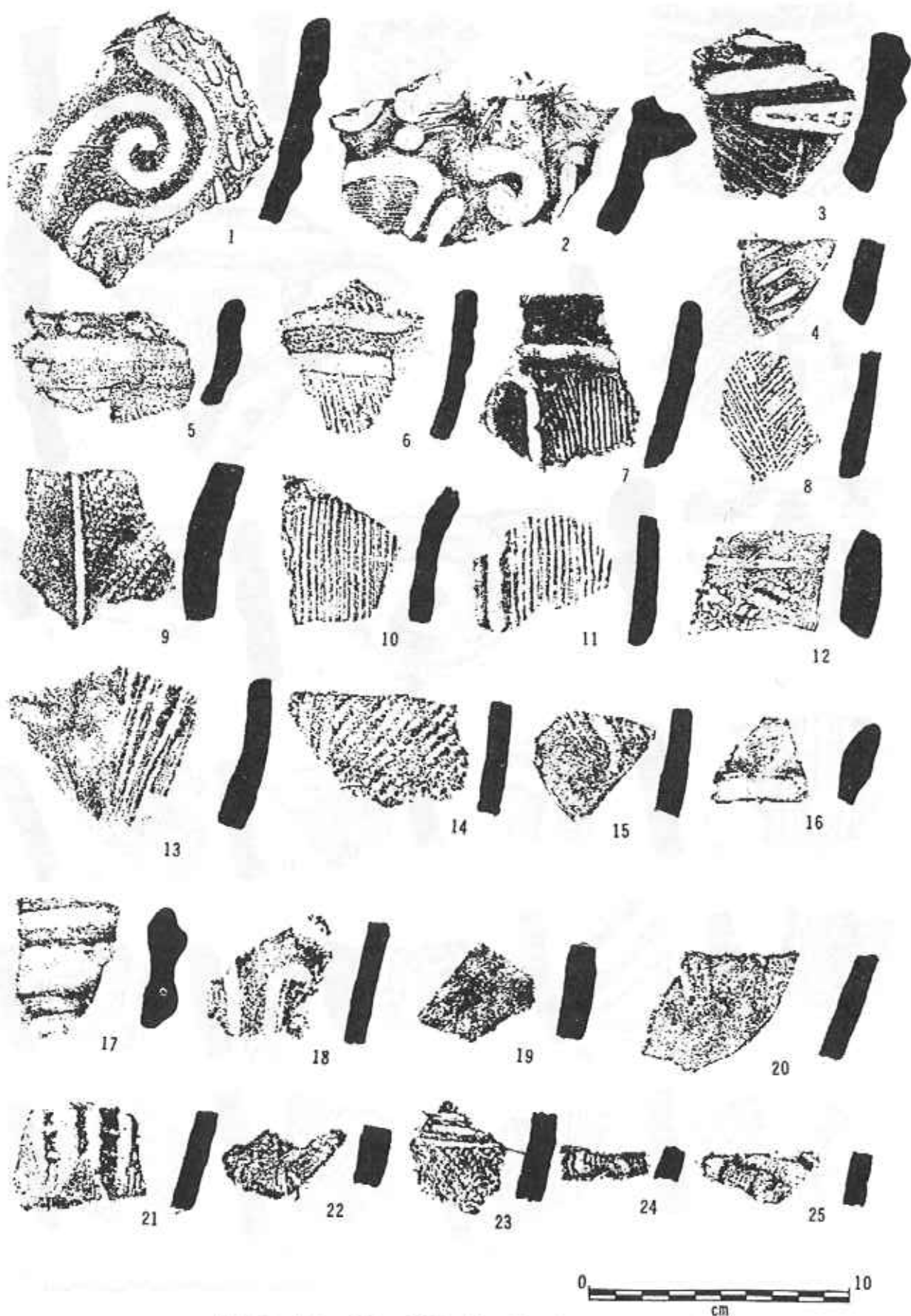
8~10 第8住居址出土



第15图 第1号住居址出土土器拓影



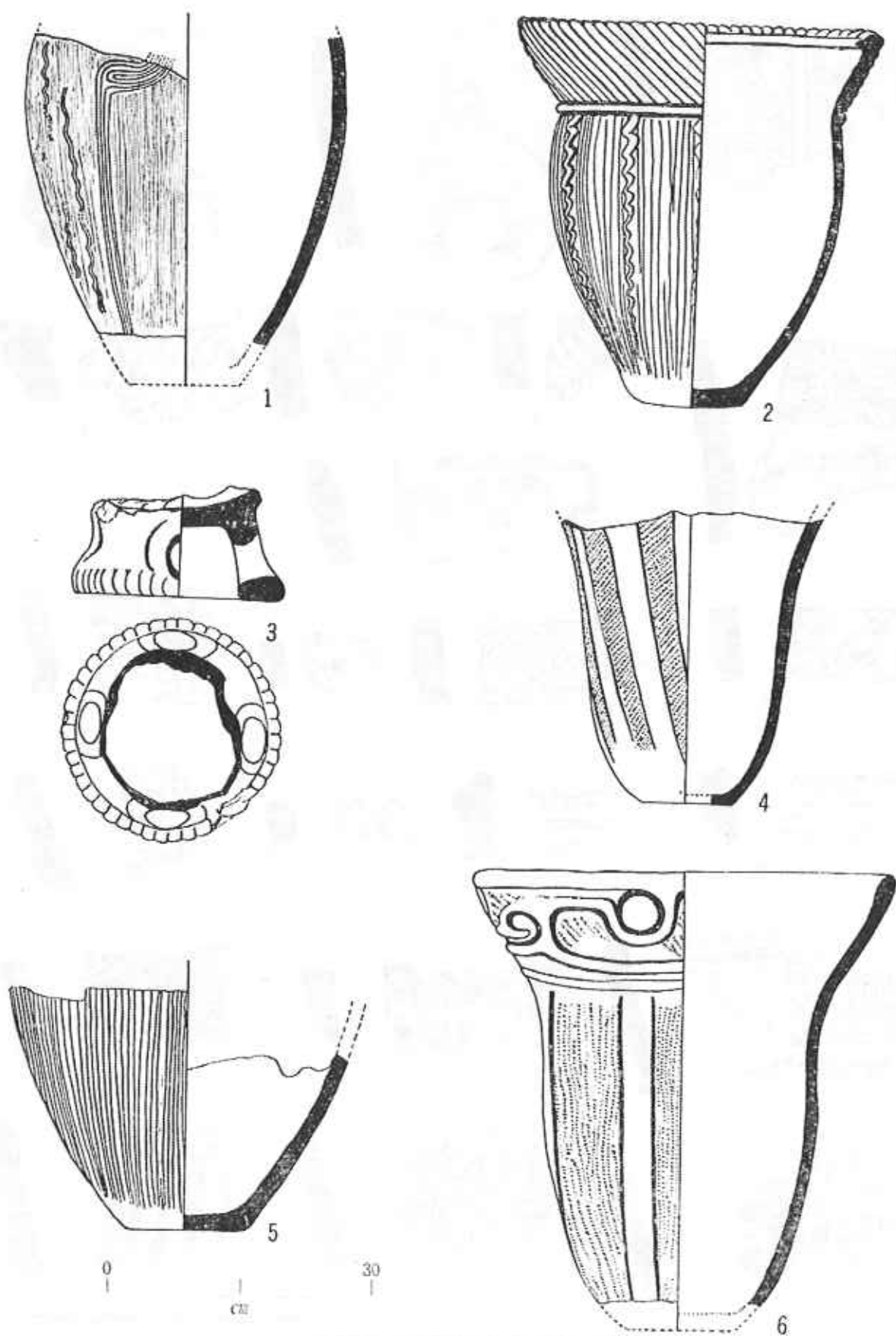
第16図 第5号住居址出土土器拓影



第17图 第2、第3、第7、第9号住居址出土土器拓影
 1~8 第2住居址出土 9~13 第3住居址出土 14~16 第7住居址出土 17~25 第9住居址出土



第18図 第11、第12、第14号住居址出土及び表面採集土器拓影
 1~4 第11住居址出土 5~9 第12住居址出土 10~13 第14住居址出土 14~23 表面採集



第194圖 出口遺跡出土土器実測圖

1. 第4住居址出土 2. 5 第5住居址埋没土器 3. 第6住居址出土 4. 第12住居址出土
6. 第16住居址埋没土器

- (B) 胴部の地文に縄文または撚糸文を多用し、これに隆起文および沈線文の組合わさるもの(第2種)
(C) 器面を彫刻的な低く幅の広い隆起帯が、渦巻状その他に変化しつつめぐり、その中間を不整列な条線文でまたはやや細かい「ハ」の字型連続文で充填するもの(第3種)

この三者のうち、第1種は加曾利EⅠ式併行のものの伝統を引くものであり、第2種は南関東のいわゆる加曾利EⅡ式土器である。これに対し第3種土器は甲信地方から駿豆地方を経て、伊豆七島にまで分布する特色ある土器で、大芝原Ⅱ式土器と仮定したものである。これは岐阜県にも類似のものがあり、いわば中部地方のローカリティーに富む土器といえよう。

なお第2種及び第3種では、地文の上を浅く削った連続S字状の懸垂文が一部に見られる。

形態はやや小型になり、深鉢形をなすのが普通である。口縁も平端で、装飾はなく断面が丸味を帯びたものが多い。ただし、一部には第15図18のように波状口縁のものもある。第1種はキヤリバー型の口縁を有している。

第14図1～5、第15図2、第16図1～3、第5図8、第19図2、5は第1種に属し、第12図8、第16図16、20、21、第17図9、12、14、22、23、第18図18、19、21、第19図6などは第2種である。そして最も特徴的な第3種は、第15図4～6、12、第16図5、7、10、12、13、14、17、18、19、第17図5～8、10、11、13、15、18、24、25、第18図1、2、3、12、13、19、などである。第18図17もこの類に入れてよからう。第15図9、10は薄手であるが、やはり同一種のものであり、同図11及び第17図1、4はこの種に伴う重ね篋描文(「ハ」の字形連続文)である。この重ね篋描文は次の大芝原Ⅲ式土器(加曾利EⅢ式併行)において盛行するが、沈線の丈が長くなる傾向がある。この大芝原Ⅲ式土器は大体において大芝原Ⅱ式土器の特徴を踏襲しているが、口縁近くに半円形に垂下連続する隆起文または沈線文などが見られるのが特徴的である。細かい刺突文をもつて「ハ」の字状連続文を構成し、胴部に施文されるのも特徴である。中伊豆地方でも天城湯ヶ島町の月ヶ瀬から典型的なものが出土しているが、本遺跡からは全く出土していない。これは本遺跡の年代を考える上に重要である。

6. 周辺の遺跡

本遺跡の周辺には数多くの先史時代遺跡が存在しているが、まず修善寺町内のみの遺跡についてみると、別表(第3表)の通りである。(台帳番号とは「静岡県遺跡地名表」(1961年)の通し番号であり、新とはその後発見されたものである。)

第3表 修善寺町縄文遺跡地名表

通 番 号	台帳 番 号	遺 跡 名	所 在 地	地 形	編 年 (土器)	遺 物	備 考
1	142	堀 切	修善寺町堀切 (益山寺裏)	丘 陵	縄 文 中 期 (加曾利E式)	磨 製 石 斧	
2	143	大 芝	〃 修善寺 字大芝	〃		打製石斧、黒曜石、土器片	
3	144	芦 原 尻	〃 修善寺 字芦原尻	〃		石皿、磨製石斧、土器片	
4	145	日 向	〃 日向 (修善寺ゴルフ場)	〃	縄 文 早・前 期 (茅山式・諸磯式)	石鏃、石皿、打製石斧、土 器片、ナイフブレード	
5	146	上 大 塚	〃 大平 字上大塚	河 段 岸 丘	縄 文 中 期・後 期 (加曾利EⅠ式、同EⅡ式、 堀ノ内式、加曾利B式)	石鏃、打製石斧、石鏃、土 器片	
6	147	本 立 野	〃 本立野 字西垣内	〃	縄文中期(勝坂式 加曾利E Ⅰ式、同EⅡ式、堀ノ内式)	打製石斧、磨製石斧、石皿 石棒、叩石、石鏃	県史Ⅰ
7	148	大 林	〃 熊坂字大林	山 陵	縄文前・中・後期(諸磯式 勝坂式、加曾利E式、堀ノ 内式)	打製石斧、石鏃、黒曜石	
8		新 平 台	〃 熊坂字平台	〃	縄 文 早 期 (茅山式)		
9		〃 中 林	〃 熊坂字中林	〃	縄 文 早 期		
10	149	小山田上	〃 加殿 字小山田上	〃	縄文中期(加曾利EⅡ式)	磨製石斧	
11	150	梅 林	〃 修善寺 字梅林	〃	縄文早期(山形押型文、楕 円押型文)	石鏃、磨製石斧	
12	151	三ノ洞	〃 修善寺 字三ノ洞	〃	縄 文 中 期	石 鏃	
13		新 神 山	〃 修善寺 字神山	〃	縄 文 早 期 (押型文)		
14	159	大 久 保	〃 大野字 大久保	〃	縄 文 中 期	石鏃、磨製石斧	
15		新 石 神	〃 大野字石神	〃	縄 文 早 期 (楕円押型文)	磨 石	
16	160	大久保上	〃 大野字 大久保上	〃	縄 文 中 期	石 鏃	
17	161	沖 原	〃 大野字沖原	丘陵緩 斜面	縄文中期(加曾利EⅠ～Ⅱ 式)	石鏃、石皿、打製石斧、石 棒、石匙、石鏃	
18		新 出 口	〃 大野字出口	〃	縄文中期(加曾利EⅠ～Ⅱ 式)	打製石斧、磨製石斧、石鏃 、石皿、石棒、石匙	
19		〃 菅ヶ沢	〃 大野 字菅ヶ沢	〃	縄文早期・中期・後期(山 形押型文、条痕文、加曾利 EⅠ～Ⅱ式)	打製石斧、石鏃	
20		〃 前 茅 野	〃 大野 字前茅野	〃	縄文早期(条痕文)	石 鏃	
21		〃 立 間	〃 大野字立間	〃	縄 文 前 期 (諸磯式)	石 鏃	
22		〃 池ノ本A	〃 年川 字池ノ本	〃	縄文早期・前期(山形押型 文、楕円押型文、諸磯C式)	石鏃、局部磨製石斧、磨製 石斧	
23		〃 池ノ本B	〃 年川 字池ノ本	〃	縄 文 前 期・中 期	石鏃、岩版(?)	
24		〃 池ノ本C	〃 年川 字池ノ本	〃	縄 文 中 期 (勝坂式)	石 鏃	
25		〃 年 川 原	〃 年川字原	〃	縄 文 前 期 (諸磯C式)	石鏃、打製石斧、磨製石斧	
26		〃 滝 頭	〃 大平字滝頭	丘 陵 部	縄 文 早 期 (茅山式)		
27		〃 瓜生野上	〃 瓜 生 野	〃	縄 文 早 期 (押型文)		
28		〃 広 野	〃 広 野	〃	縄文中期(加曾利EⅠ～Ⅱ 式)	打製石斧、石鏃、石皿	
29		〃 中 里	〃 修善寺 字中里	河 段 岸 丘	縄 文 中・後 期	磨製石斧	
30		〃 横 瀬	〃 横 瀬	丘陵緩 斜面	縄 文 中 期	磨製石斧	
31	162	柏 久 保	〃 柏 久 保	河 段 岸 丘	縄文中期(勝坂式・加曾利 E式)	スクレイパー、打製石斧、 石匙、石鏃	
32		新 鉢 窪	〃 牧ノ郷 字鉢窪	丘陵緩 斜面	縄文早期(楕円押型文、山 形押型文)		

すなわち先土器時代遺跡2、縄文時代遺跡32（先土器と重複）で、弥生時代遺跡は皆無である。縄文時代遺跡を時期別にすると早期12、前期5、中期17、後期4、晩期0、時期不明2（一部重複）ということになり、中期が最も多く、後期より急激に減少し、晩期以後姿を消してしまうことになるわけである。しかし完全に消滅したのか否かは今後さらに精査した後でなければ断定できない。

次に中期でも出口遺跡と関連のある後半期の遺跡を拾ってみると、樋切、土大塚、本立野、大林、小山田上、沖原、菅ヶ沢、広野、柏久保の9遺跡がある。このうち本遺跡に隣接する位置にある沖原と菅ヶ沢は最も深い関係にあつたと思われる。そこでこれらの両遺跡について次に概説しよう。

沖原遺跡（第1図3）

出口遺跡の北東側緩斜面を下ると、再び緩い斜面に遭遇する。これが沖原遺跡で南向きの広い斜面から多くの遺物を出土する。距離的には出口遺跡と僅か200 mしか離れていない。従来はこの遺跡の方が散乱遺物の多い関係で、早くから知見に上り、菅ヶ沢、出口両遺跡の地域はさほど注目されない状況にあつた。出土遺物も加曾利EⅠ式・加曾利EⅡ式、加曾利EⅢ式を出土し、出口遺跡の場合とよく似ている。出口遺跡同様かなりの規模を持つた集落が存在したと思われるが、この方は今回の工事に関係なく、未調査のままである。石器も第3表で見る通り、各種のものを多量に出土している。

菅ヶ沢第一遺跡（第1図2）

出口遺跡の直ぐ北東側約120 m離れた一段低い地域の、沖原遺跡東方に伸びる東向き斜面から、今回の工事で三つの住居址が確認され、そのうち1つは石囲いの跡をもち、他は焼土のみの跡を持っていた。ほかにも幾つかの住居址が存在したらしい。おそらく一つの集落があつたのであろう。時期は出口や沖原と同様で、縄文中期後葉である。

菅ヶ沢第二遺跡（第1図4）

出口遺跡の東方300 mの地点にあり、両者の間には低い凹地が存在している。沖ノ原の東南部から南へ伸びる舌状の広いふくらみで、ここも農地耕造改善工事ですっかり潰れてしまった。やはり加曾利EⅠ式土器や加曾利EⅡ式土器を出土し、その範囲や地形から考えて、沖原や出口に劣らぬ集落が存在したものと推定される。

なおこの遺跡からは早期の山形押型文土器や条痕文土器を出土し、またローム中より黒曜石も発見されたので、かなり古くより居住地となつたらしい。

この四遺跡を総合的に見ると、一番北側にある沖原遺跡が元締の位置にあり、これから東と西に尾根が分れるが、その東側の尾根に菅ヶ沢第2、西側の尾根に出口遺跡が存在するのである。そして沖原と出口の間の低斜面に菅ヶ沢第1遺跡がある。

あるいは一つの大集団の中で、幾つかの小群に分かれていたのであろうか。この四つの遺跡の相互関係を明確にすることは、集落の群在構成を知る上で大いに注目される。今後の研究課題であろう。

次にこれらの遺跡の群在する大野丘陵は、北東に伸びて田原野、浮橋方面に連なるが、これらの地域はまた縄文早期及び前期の小遺跡がきわめて多く存在するところである。さらに北方には深沢川の谷を越えて田中山に至るが、ここはまた松岡、中、土沢など先土器時代遺跡や、縄文早期遺跡の分布する地域であり、歴史の流れの中でやはり関連性をもつものであるかも知れない。

7. 総 括 的 考 察

本遺跡は結局縄文中期後葉の集落址であり、加曽利EⅠ式土器と加曽利EⅡ式土器の使用された時期であることが明らかとなつた。この両形式の土器は相互に前後関係があり、第3住居址と第4住居址、第6住居址と第7住居址などの関係がこれを証明している。ついでに県東部における他遺跡の例を紹介しつつ、もう少しこの加曽利E式土器について考えて見よう。まず吉原市境上ノ段遺跡では二つの配石遺構が発見されたが、敷石の直上および同一レベルから加曽利EⅢ式土器を出土し、この敷石下5cm~20cmの間より加曽利EⅡ式、さらに25cm~40cm位の間で加曽利EⅠ式土器が発見され、加曽利EⅠ式土器の包含層下部では勝坂式や阿玉台式の土器も混つている。^(注2) また沼津市鳥谷の大芝原遺跡では第2層(地表下)から加曽利EⅢ式土器を出土し、第3層では加曽利EⅡ式土器の住居址が発見され、その下方より加曽利EⅠ式土器を出している。^(注3) このように加曽利E式土器は当地方においても、ほぼ三形式に分けられることが層位的に明らかとなりつつあるが、南関東でも本形式土器の細分が行われ始めたのはごく最近のことである。特に加曽利EⅢ式に関しては、これが明確化したのは横須賀市吉井城山第一貝塚の報告が出て以来のことである。^(注4)

従来縄文中期の遺跡はきわめて多く発見され、特に加曽利E式土器は当地方の至る所に分布して、その盛況ぶりを示していたのであるが、これがⅢ形式に分類されることによつて、その遺跡の規模なり、経続期間なりの考え方が大きく変貌してきたことは当然である。広大な面積にわたつてこの種の土器や石器が分布していても、決して一時期における大集落の跡ではなかつたのである。

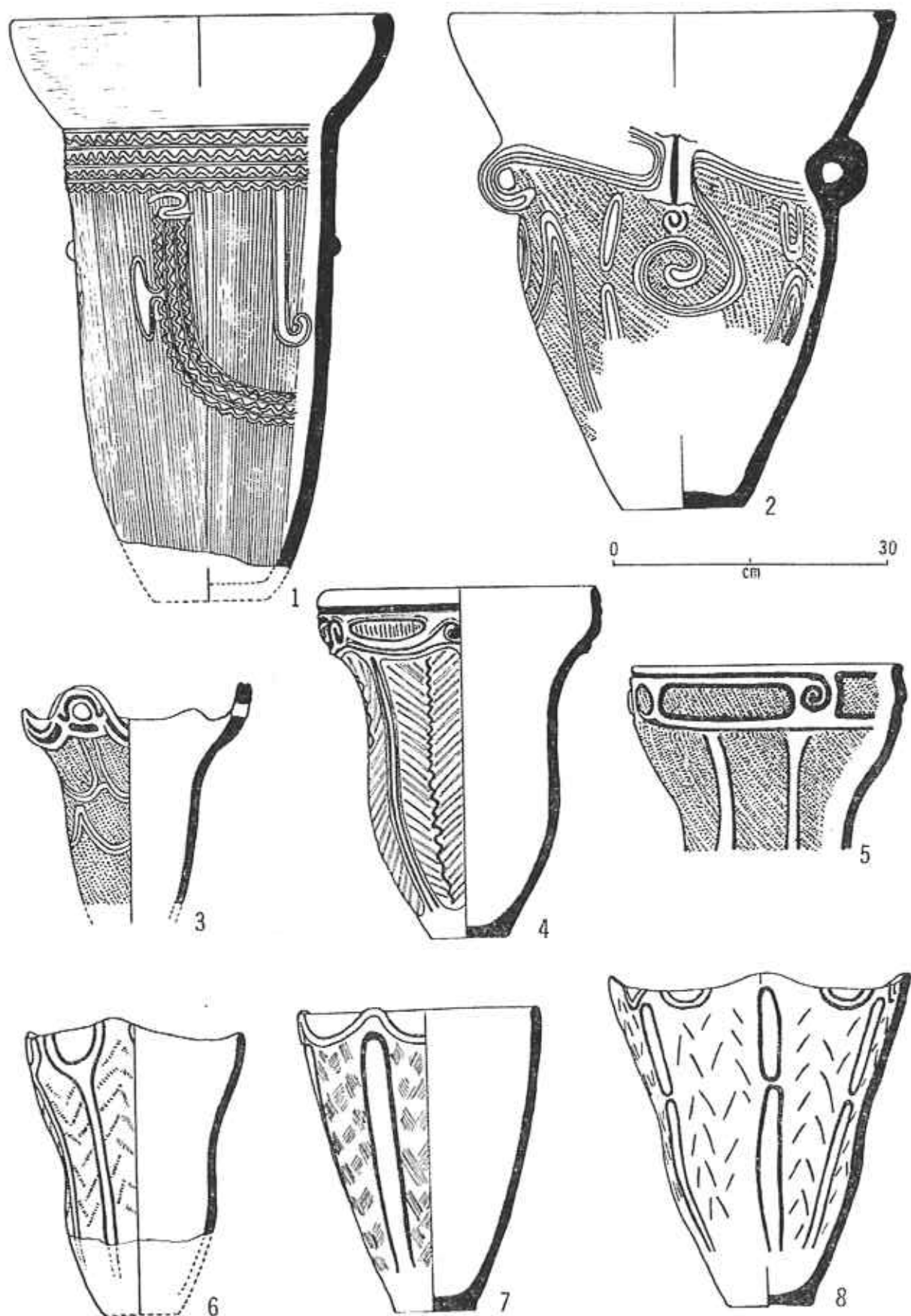
県東部における加曽利E式土器の主要出土例は、第20図に見る如くであるが、加曽利EⅠ式では熱海市下多賀字新釜、伊東市玖須美区仏現寺^(注5)、三島市宅町田字千枚原、田方郡大仁町三福熊野神社付近などがあり、加曽利EⅡ式では賀茂郡松崎町岩科西ノ段、三島市千枚原、沼津市鳥谷字大芝原、駿東郡裾野町茶畑字屯屋敷、吉原市境上ノ段などがある。また加曽利EⅢ式土器は伊東市岡字赤坂^(注6)、沼津市鳥谷字大芝原、富士宮市大岩字丸谷戸などから完形またはそれに近いものが出土し、田方郡天城湯ヶ島町月ヶ瀬字本郷、駿東郡長泉町八分平付近などからも典型的なものの破片が発見されている。当出口遺跡では加曽利EⅢ式として明確に区分できるものは出土していない。

なおこれらの三形式は一応区分されても、すべての破片が明確に決定されるものではなく、加曽利EⅡ式の時期には加曽利EⅠ式の伝統を持つた土器がある程度残り、またⅢ式の時期にはⅡ式的要素の濃い土器も伴出しているのである。これらはすべて残象として捉えることができよう。

出口遺跡の場合も調査の不十分な第4、第8、第10、第13の住居址については加曽利EⅡ式土器が出土していないというだけで、十分な調査が出来ていれば、あるいは多少の変更があつたかも知れない。つまり加曽利EⅠ式土器と考えている土器片が、実はⅠ式土器片の残象であつて、実はⅡ式の時期であつたということになりかねないからである。

とにかく、本遺跡では加曽利EⅠ式期からⅡ式期にかけて、少なくとも50~100年間の生活が考えられ、加曽利EⅢ式期には、ほぼ消滅したものと推定されるのである。

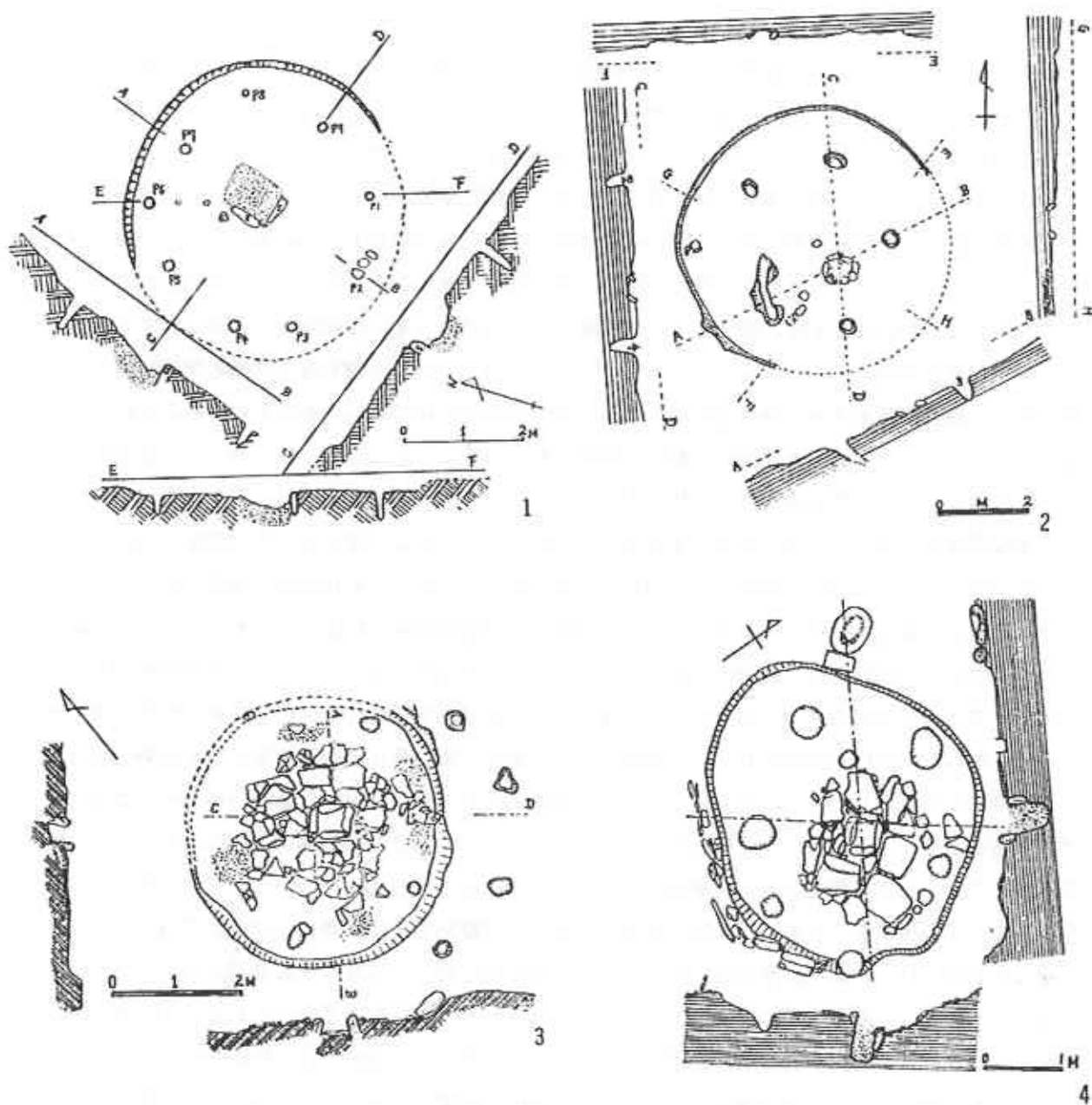
次に住居址についてであるが、本遺跡の場合は両時期共、円形竪穴の形態をとつており、いずれかといえば加曽利EⅡ式期のものが大きいようである。また加曽利EⅠ式期のものは炉に石囲いが無いよ



第20図 駿豆地方出土加曾利E式土器（主要例）

1. 大仁町三福 2. 伊東市仏現寺（以上加曾利EⅠ式） 3. 吉原市上ノ段 4. 裾野町電屋敷
5. 三島市奥山（以上加曾利EⅠ式） 6. 沼津市大芝原 7. 富士宮市丸ヶ谷戸 8. 伊東市赤坂（以上加曾利EⅢ式）

うであり、逆にⅡ式期のものには石囲いのものが多いようである。こうしてみると一番問題になるのが第6住居址である。この住居址は ①住居址の規模が大きくⅡ式期のものに勝るとも劣らない。②石囲いがある。③明確に加曾利EⅠ式期と判段できる第15号住居址の上層にあつて、後出のものである。④加曾利EⅡ式土器の破片も若干出土している。などの諸点を総合すると多分に加曾利EⅡ式期の住居址ではないかという疑問が強まるのである。しかし北側に棚状の張り出しがあり、この部分から勝坂式土器に類似した台付鉢形土器の台部が発見され、これが加曾利EⅠ式期における勝坂式の残象として捉えることができても、それ以降には決してならないと考えられる点、前項の疑問に反証するものである。なお加曾利EⅢ式の第5住居址に接触し、また同じく第7住居址と一部が複合する点、やはり加曾利EⅠ式期のものと見るべきであろう。それにしても同じ加曾利EⅠ式期の第15住居址の上層にあり、調査の結果は第6号の方が後出である点、同時期に建て直しされたものと推定されるのである。そうすると加曾利EⅠ式期にも新旧の住居址があつて、一応二つに分けて考える必要も出てくるわけである。しかも第6住居址は第15住居址の竪穴の上に土を盛つて床を張り、さらに周辺を削つて大きな床面を作っているのである。家族数の増加か、または用途の変更か、その理由は明らかではないが、6号住居址の北側に、棚状の張り出しがつくられたことに、この住居址の性格が示されているのではないかと推察される。張り出し上から、台付土器の台が発見されたことなどから考えて、あるいは祭壇の如き用に供された施設ではあるまいか。すると特殊な立場の人、たとえば司祭者の如き人の住居と考えられるのである。何れにしても第6号住居址は、第15号住居址の上に拡大されて新たに作られ、さらに石囲い部が作られたことになるわけである。第15号址の廃棄と第6号址建築の間にどれだけの時間が経過しているか知る由もないが、加曾利EⅠ式期の途中から石囲い部が生じたことは事実である。そしてⅡ式期に至つて盛行したのであろう。この点は今後他地域の遺跡の場合とも比較検討して行くことが必要である。従来報告された遺跡では加曾利E式の細分がなされていないものが多く、ここで引用することができないのは残念である。長野県下では、勝坂式期に石囲い部がすでにあることが知られているが、静岡県下ではその例をまだ知らない。少なくとも静岡県東部、特に伊豆地方ではこの加曾利EⅠ式期の途中に、その初像を見るのではないかと思うのである。伊東市仏現寺遺跡では加曾利EⅠ式期の円形竪穴住居に、石囲い部^(IE7)があり、出口遺跡の第6号址と同様中央より大きく南寄りに位置している点共通している。三島市奥山、沼津市鳥谷、富士宮市大岩宇賀輪等ではやはり円形竪穴住居址に石囲い部が存在するが、これらはいずれも加曾利EⅡ式期または後期のもので、この時期にはほとんど普遍的である。次に伊東市赤坂、三島市千枚原^(IE8)等では敷石住居址が発見されているが、赤坂の場合からすると、円形竪穴の中に敷石が見られ、中央にやはり石囲い部が見られる。このほか伊豆地方に多い敷石住居址は、加曾利E式の三分された今日において、加曾利EⅢ式以前に遡り得るものは今のところ皆無である点も大いに注目すべきであろう。つまりこの種の住居址は縄文中期末の加曾利EⅢ式期に初現し、以後伊豆諸島の利島大石山遺跡^(IE9)に見る如く、後期の称名寺式期に継承され、さらに三島市奥山のように堀ノ内式期にも至っているのである。当出口遺跡に数多くの住居址が発見されながら敷石住居が一つも存在しないのは、やはり加曾利EⅢ期まで集落がほとんど続かなかつたことを示す一証となるかも知れない。同じ修善寺町でも西北方の達摩山地に見られる広野遺跡では、敷石遺構が存在したが、これは加曾利EⅡ式土器の出土地であることを考えると、自ら理解



第21図 東駿及び伊豆縄文時代竪穴住居址主要例

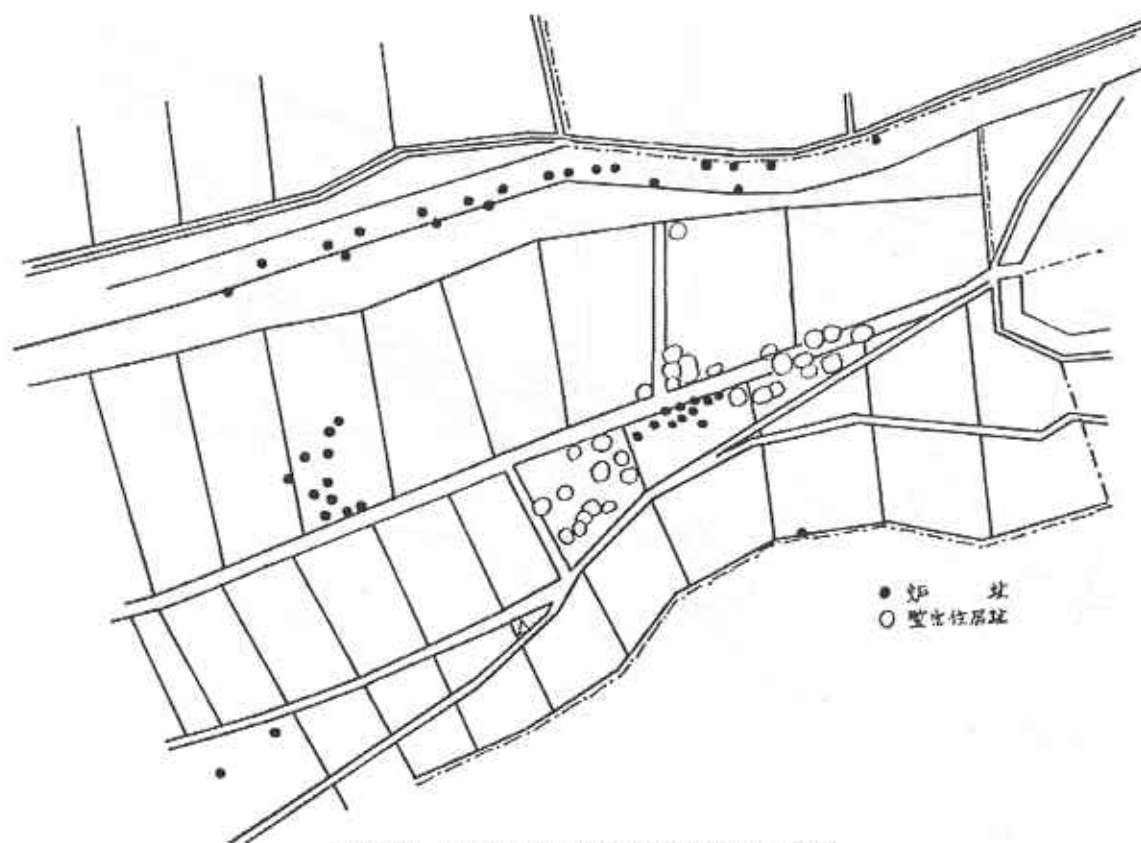
- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 1. 沼津市鳥谷・大芝原遺跡（加曾利EⅡ式） | 2. 伊東市玖須美・仏現寺遺跡（加曾利EⅠ式） |
| 3. 伊東市岡・赤坂遺跡（加曾利EⅢ式） | 4. 伊豆利島・大石山遺跡（称名寺式） |

がいくつかある。

柱穴は出口遺跡の場合、加曾利EⅠ式期の第15号址が6本、第6号址が5本であるが、同時期の伊東市仏現寺でも5本柱が発見されている。加曾利EⅠ式期では4本柱1、5本柱1、6本柱4（推定2を含む）、7本柱1が存在するが、常識的には4本柱または6本柱がよいように考えられる。しかし沼津市大芝原では9本柱が発見され、三島市奥山でも同様のものが見られる点、5本、7本の場合と同様奇異に感ずるわけである。この奇数柱はどう解すべきであろうか。その鍵を握るのは柱穴の形である。それはいずれも真直ぐであり、おそらく真直ぐ円形に並ばせ、その上に相互に枠を渡して輪を作り、これに壁外から垂木を立てかけて円錐形の骨組みを作つたものと思われる。各垂木間は「つる」などで横に幾本も結び、その上に茅を葺き下して円錐形住居を形成したことが容易に推察される。結局円錐形にするには柱の数をできるだけ多くすることが望ましいということになるのである。

住居の入口は風向より考えて北口は考えられず、現在の山ノ畑部落の状況より判断して、おそらく南向きまたは東向きであつたと思われる。第6号住居址の北側に陥状張り出しがあることでも立証できよう。

次に集落に関してであるが、すでに述べたように北に開いた馬蹄形配置をなしていることは最も重要なことであろう。縄文時代早・前期の集落についてはまだ全国的にもその全貌を知る好資料の発表がないが、中期に関しては若干の報告がなされている。まず千葉県小見川町の白井大宮台見塚を始め茨城県霞ヶ浦周辺の諸見塚では、いずれも一つの台地をめぐつて広範囲に貝殻が堆積し、それらは環状をなしている。^(注10) 岩手県大船渡市蛸之浦見塚なども同様である。貝殻は舌状台地の周縁に堆積してい



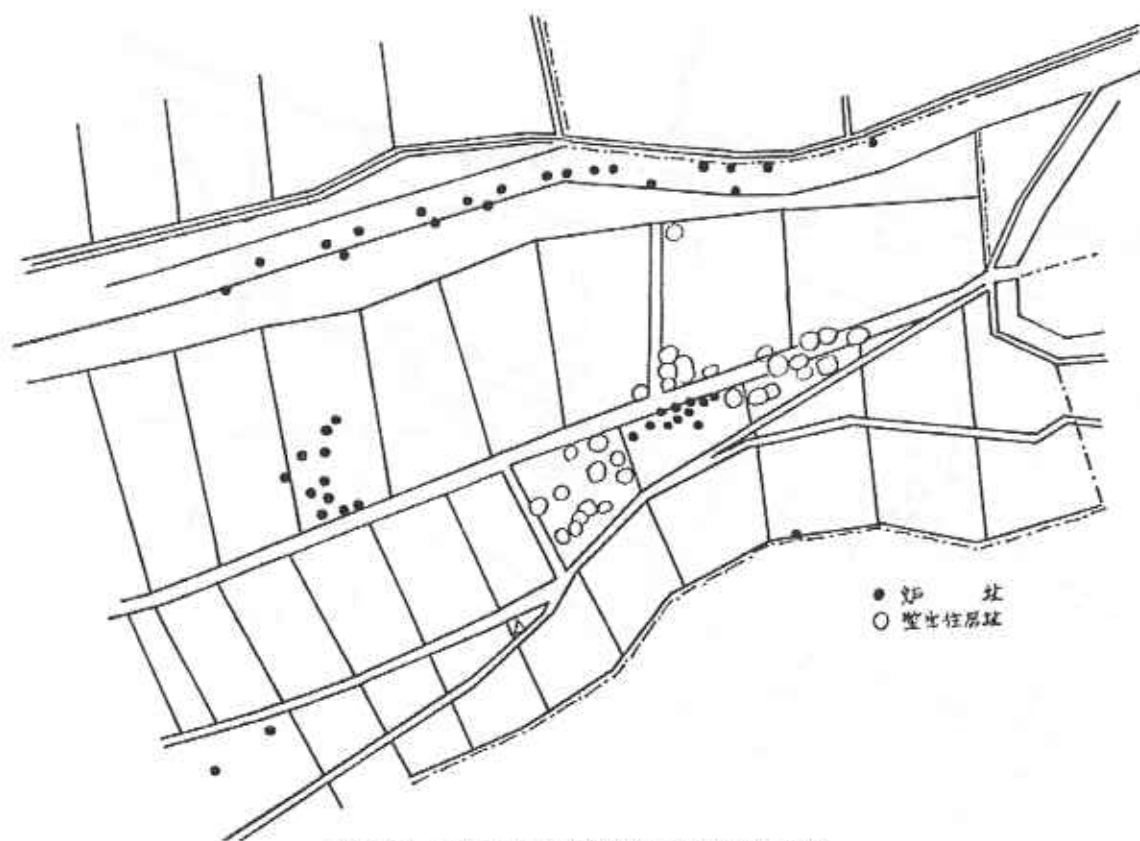
第22図 長野県尖石遺跡竪穴住居址分布図

がいくわけである。

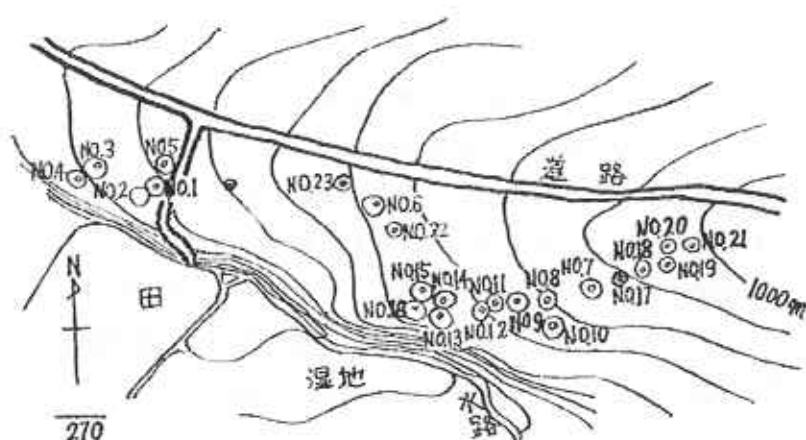
柱穴は出口遺跡の場合、加曽利EⅠ式期の第15号址が6本、第6号址が5本であるが、同時期の伊東市仏現寺でも5本柱が発見されている。加曽利EⅡ式期では4本柱1、5本柱1、6本柱4（推定2を含む）、7本柱1が存在するが、常識的には4本柱または6本柱がよいように考えられる。しかし沼津市大芝原では9本柱が発見され、三島市奥山でも同様のものが見られる点、5本、7本の場合と同様奇異に感ずるわけである。この奇数柱はどう解すべきであろうか。その鍵を握るのは柱穴の形である。それはいずれも真直ぐであり、おそらく真直ぐ円形に並ばせ、その上に相互に枠を渡して輪を作り、これに壁外から垂木を立てかけて円錐形の骨組みを作つたものと思われる。各垂木間は「つる」などで横に幾本も結び、その上に茅を葺き下して円錐形住居を形成したことが容易に推察される。結局円錐形にするには柱の数をできるだけ多くすることが望ましいということになるのである。

住居の入口は風向より考えて北口は考えられず、現在の山ノ畑部落の状況より判断して、おそらく南向きまたは東向きであつたと思われる。第6号住居址の北側に棚状張り出しがあることでも立証できよう。

次に集落に関してであるが、すでに述べたように北に開いた馬蹄形配置をなしていることは最も重要なことであろう。縄文時代早・前期の集落についてはまだ全国的にもその全貌を知る好資料の発表がないが、中期に関しては若干の報告がなされている。まず千葉県小見川町の白井大宮台見塚を始め茨城県霞ヶ浦周辺の諸貝塚では、いずれも一つの台地をめぐつて広範囲に貝殻が堆積し、それらは環状をなしている。^(E10) 岩手県大船渡市蛸之浦貝塚なども同様である。^(E11) 貝殻は舌状台地の周縁に堆積してい



第22図 長野県尖石遺跡竪穴住居址分布図



第23図 長野県与助尾根遺跡聚穴住居址分布図

長野県茅野市の尖石遺跡、および与助尾根遺跡がある。尖石では昭和5年より8年までに、炉址45ヶ所が発見され、さらにこの炉址を中心とする住居址の存在を知つて、昭和15年から17年までの間に住居址32ヶ所と、15の炉址を追加した。こうして100個に近い多数の住居址が存在したことを確認したのである。その配置を見ると東側に口を開いた、大きな馬蹄形をなしていることがわかる。これも出土遺物から見ると勝坂式から加曾利E式に至る複合遺跡で、200~300年間続いた集落と推定されている。したがって正確には各時期別の細かい分析が必要であろう。それにしても馬蹄形配置が崩れるものではないようである。

もう一つこの尖石の北隣にある与助尾根は北半が調査されていないが、南半の発掘状態を見ると、28の住居址がやはり東に開いた馬蹄形集落の存在したことが容易に推測できるのである。東側が開いているのは、その方向が高所に当るためで、出口遺跡では北側がやや下るとはいえ、また高くなり、全体的には南に向つて下向する丘陵であることを考えれば、低い方向に向つて張り出す点、尖石や与助尾根などと相互に共通するわけである。出口遺跡の場合には、斜面における住居址の高低比は250cm以内である。その傾斜の中に16戸の住居址が包括される。

こうして縄文中期の集落形態として、典型的な馬蹄形配置をとる具体例がまた一つ追加され、また、加曾利EⅡ式期の集落にはほぼ10軒を単位として構成されるものの存在することを明らかにした。残された問題は、住居が馬蹄形に配置された中央空地の意味であるが、恐らく部落共同の広場として各種の用途があつたであろうが、この出口遺跡の場合には、極く少量の土器片が出土したのみで、他に何等の施設、遺物等を見ることができなかった。

最後にこの集落に居住した人々の生業であるが、海浜や大きな川から遠ざかると共に石鏃が皆無であるのに対し、石鏃のきわめて多い点等を考え合わせると、山間における狩猟中心の集落であつたことが推知されるのである。

結局出口遺跡は中伊豆地方における縄文中期後葉の山村集落であつた。

るので、その内側に集落があつたものと考えられる。したがって貝層の線に平行して住居址が存在するとすれば、その集落の形態はほぼ馬蹄形をなすであろうことが推測されるのである。このことは本県浜松市観塚遺跡等の後期の集落についても指摘されているところである。

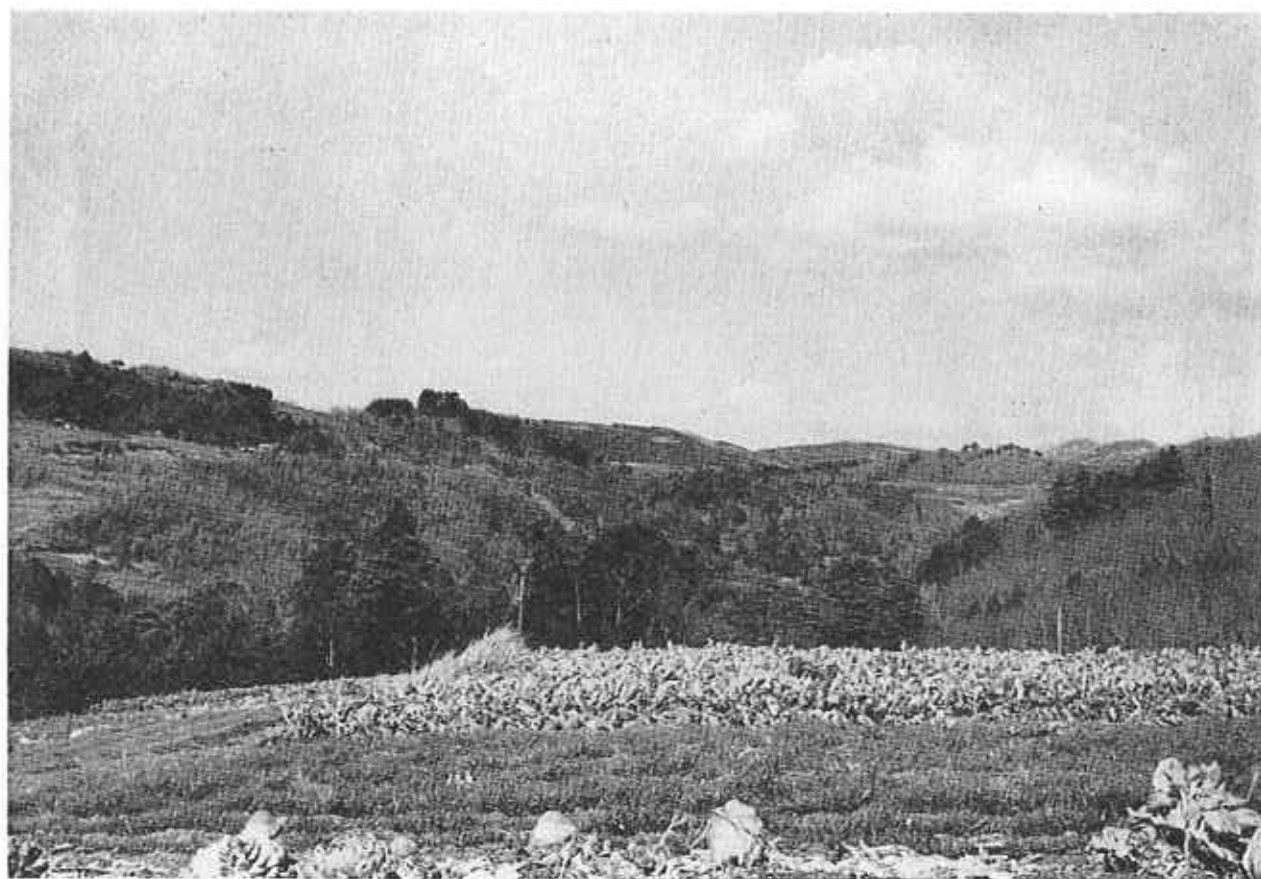
実際に縄文中期集落の形態がある程度明確に現出した例としては長

8. あとがき

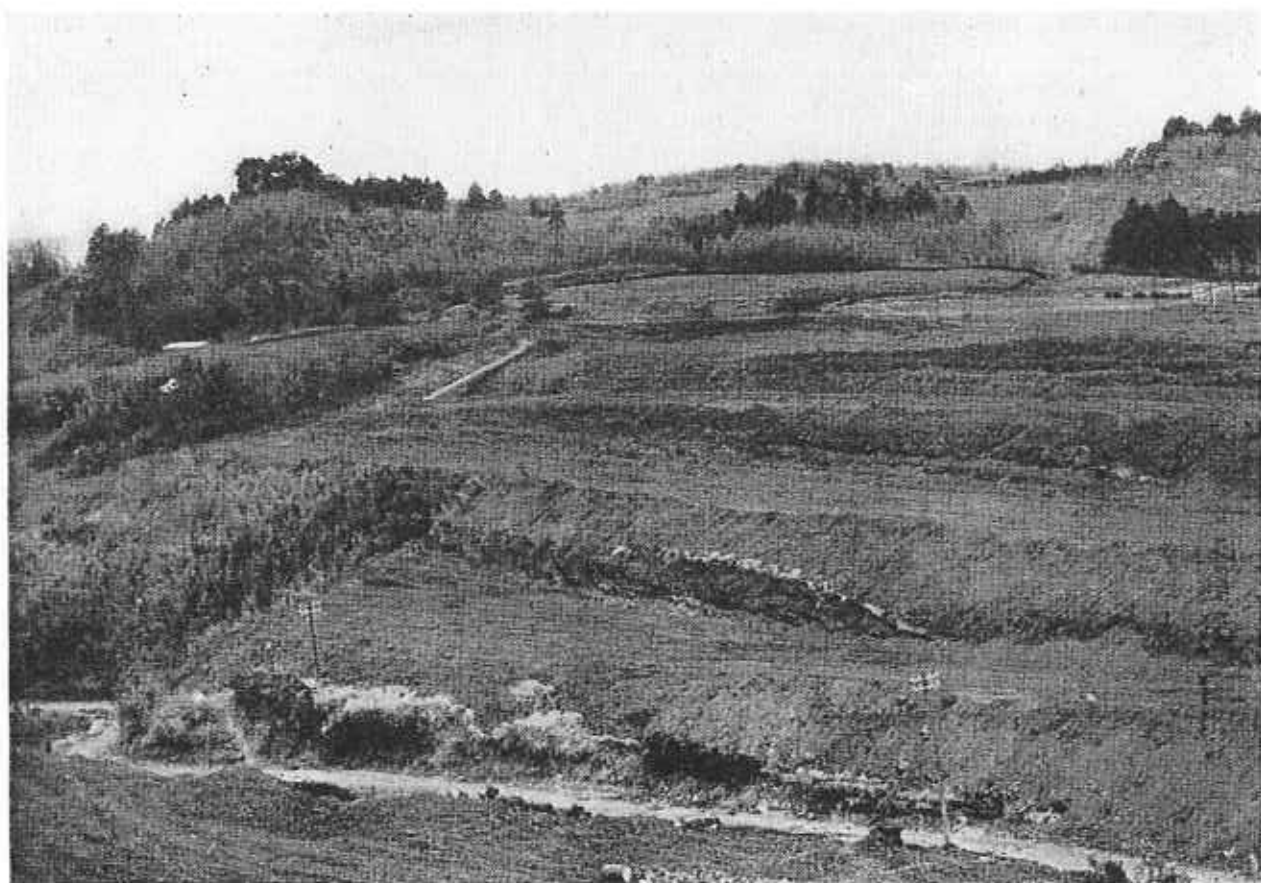
以上不意の工事に伴う緊急調査の結果をまとめて見たが、波状的飛石調査が終了した1月下旬から僅か1ヶ月足らずにしてまとめた原稿であるため、十分な検討のできなかつた面もあるであろうし、参照すべき文献のもれもあり、また大方諸賢の御教示を仰ぐ暇もなく、決して満足なものとはなっていない。しかし記憶の新たな中にまとめた利点もあつたことを考えると、決して無駄ではなかつたと思うのである。今後の研究や各方面からの御指導によつてなお修正されることもあろうが、縄文中期集落のほぼ完全に近い形態を知り得るという、まことに幸運にも珍しい機会に恵まれたので、縄文集落研究の一助にとともに考え、とりあえず概要を報告して、叱正を期待する次第ある。(1964年2月末日)

(注)

1. 「沼津市誌」上巻中小野真一「先史文化の発展」。1961年。
2. 小野真一「吉原市上ノ段遺跡調査略報」沼津女子商業高校考古館報第4号。1964年。
3. 「沼津市誌」上巻。1961年。
4. 岡本勇「横須賀市吉井城山第一貝塚出土の土器」横須賀市博物館研究報告(人文科学)第7号。1964年。
5. 「伊東市誌」資料篇中長田実・小出義治「考古学的調査報告」1958年。
6. 「伊東市誌」本編の中長田実「原始時代」に紹介。1962年。
7. 8. 「三島市誌」上巻中長田実「原始社会」に紹介。1958年。
9. 東京都文化財報告書6「伊豆諸島文化財協会調査報告」第二分冊 戸沢充則「利島大石山遺跡の第二次調査」1960年。
10. 「世界考古学大系」1。内陸文化の繁栄の頃。
11. 同上。
12. 麻生優「縄文時代後期の集落」考古学研究26号。1950年。
浜松市教育委員会「縄文遺跡総括篇」内藤晃「住居」1952年。
13. 宮坂英次「尖石石器時代遺跡」史跡名称天然記念物調査報告(文化財保護委員会編)第1集。1957年。および注10と同じ文献。
41. 宮坂英次「長野県諏訪郡与助尾根遺跡」日本考古学年報3。1955年。



遺跡の遠景（南方、立間遺跡より）



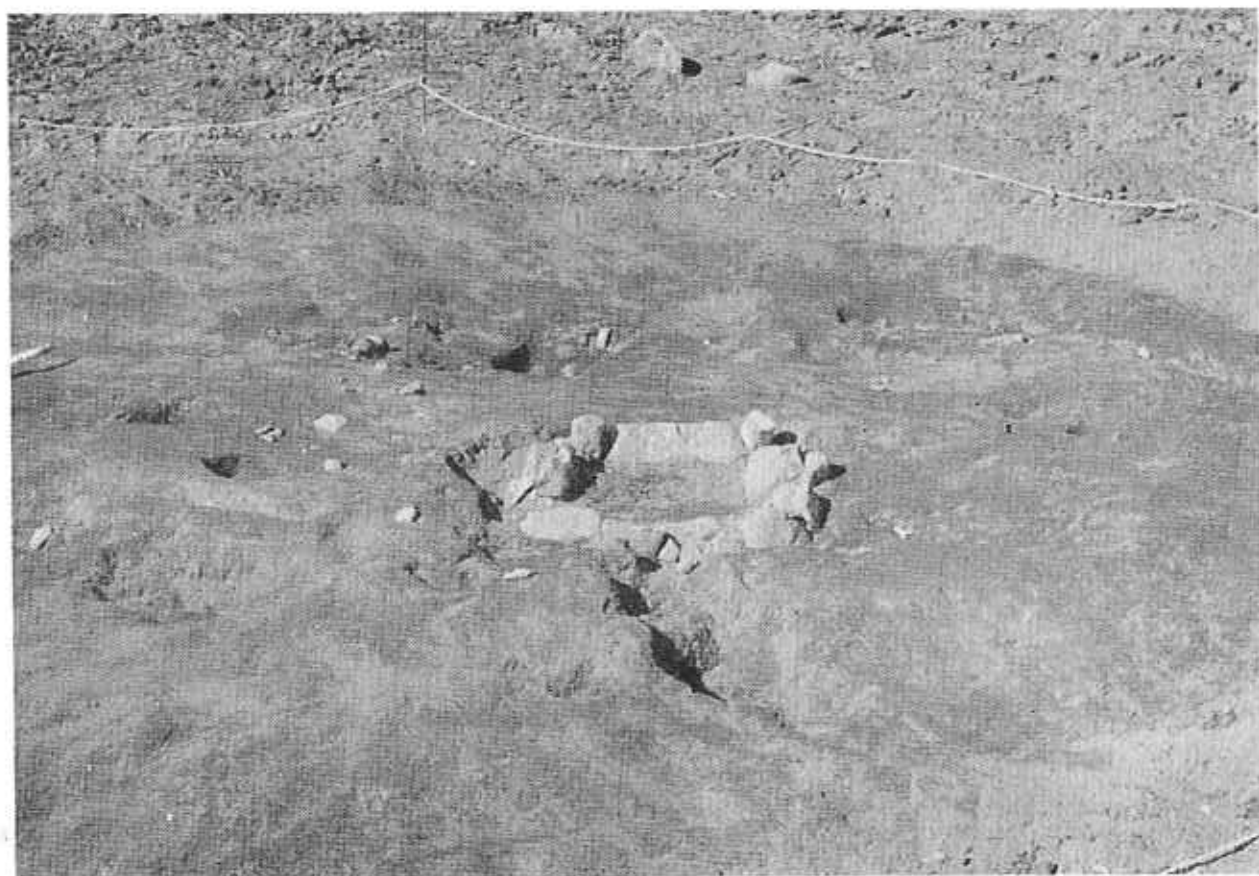
遺跡の全景（黒線の部分、東側より）



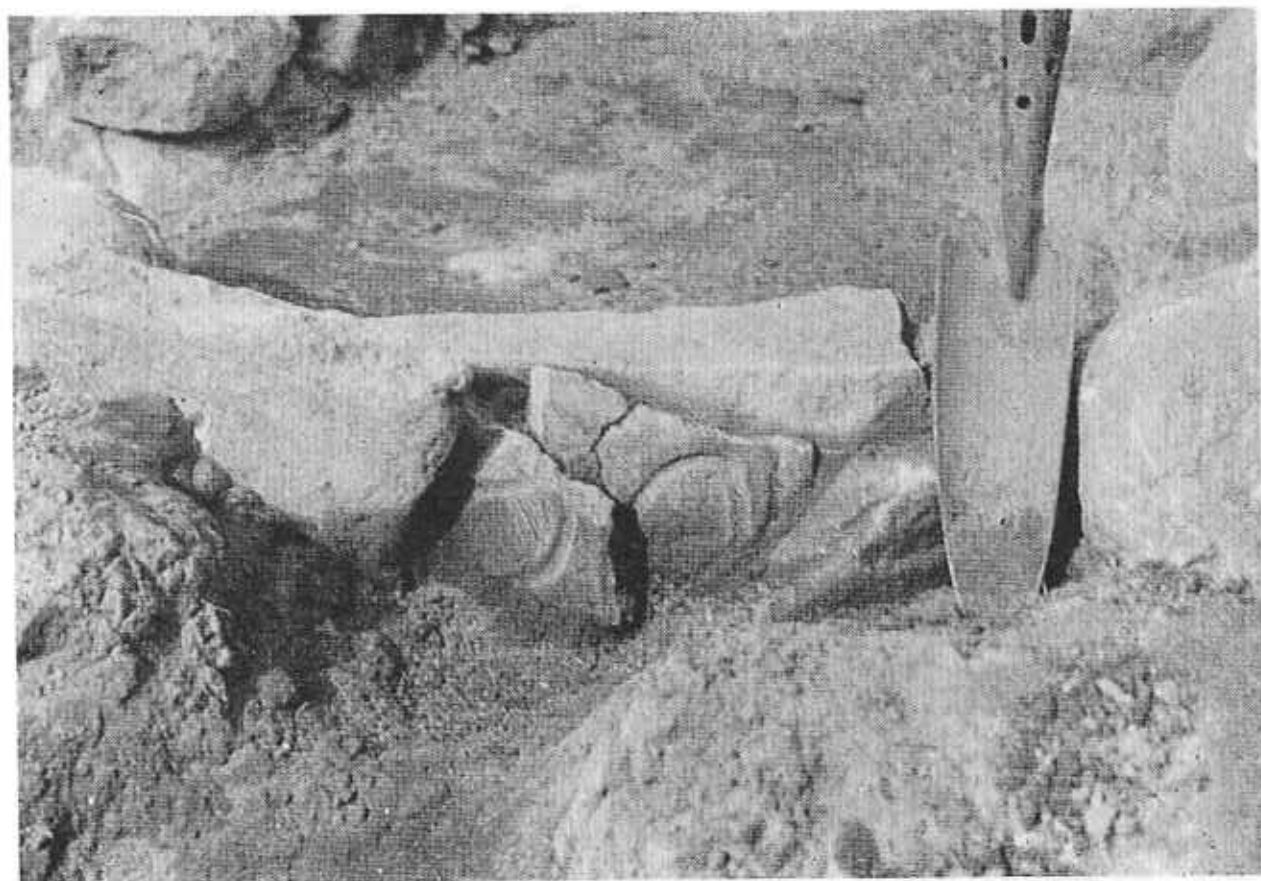
道跡の調査風景



ブルドーザーによつて表土は破壊された



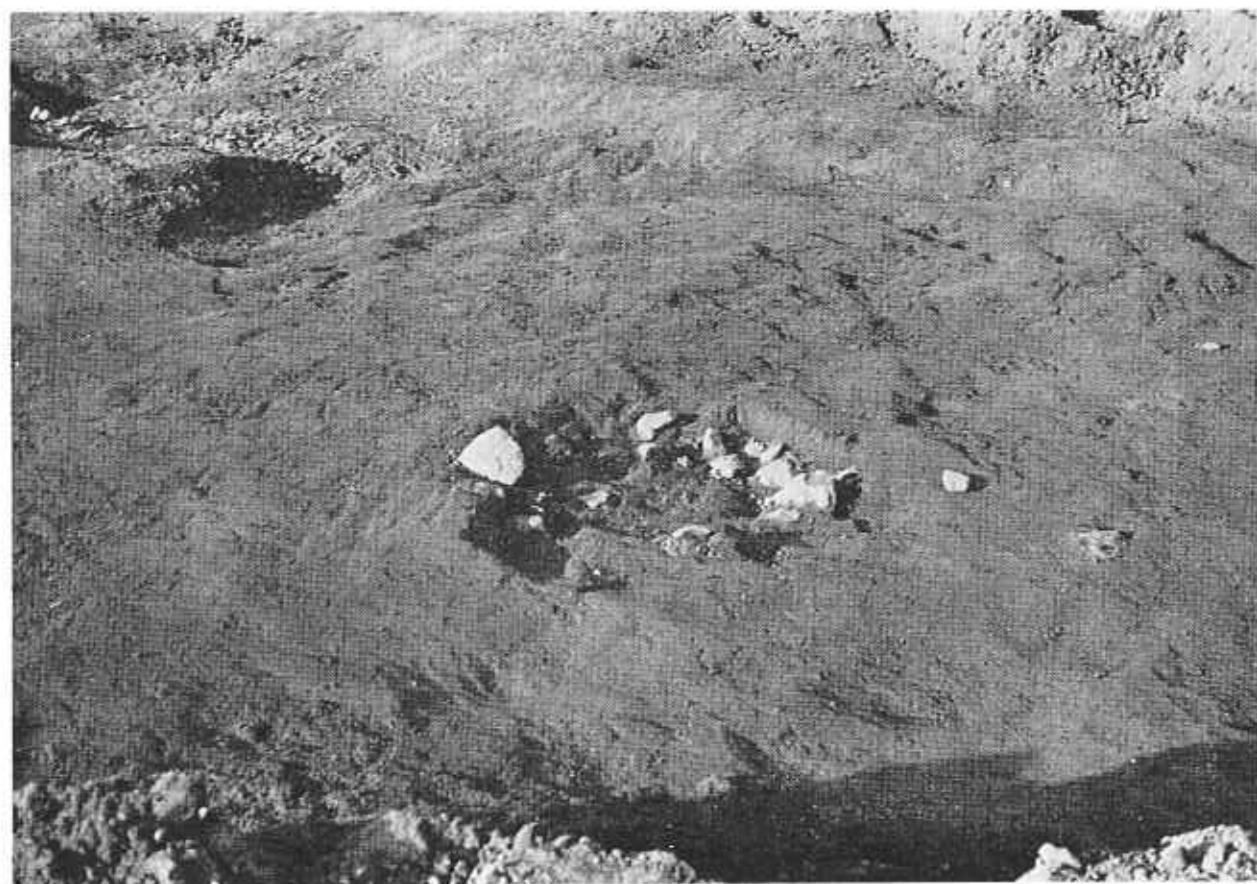
第 1 住 居 址



第1住居址石炉に併用された土器片



第 5 住 居 址



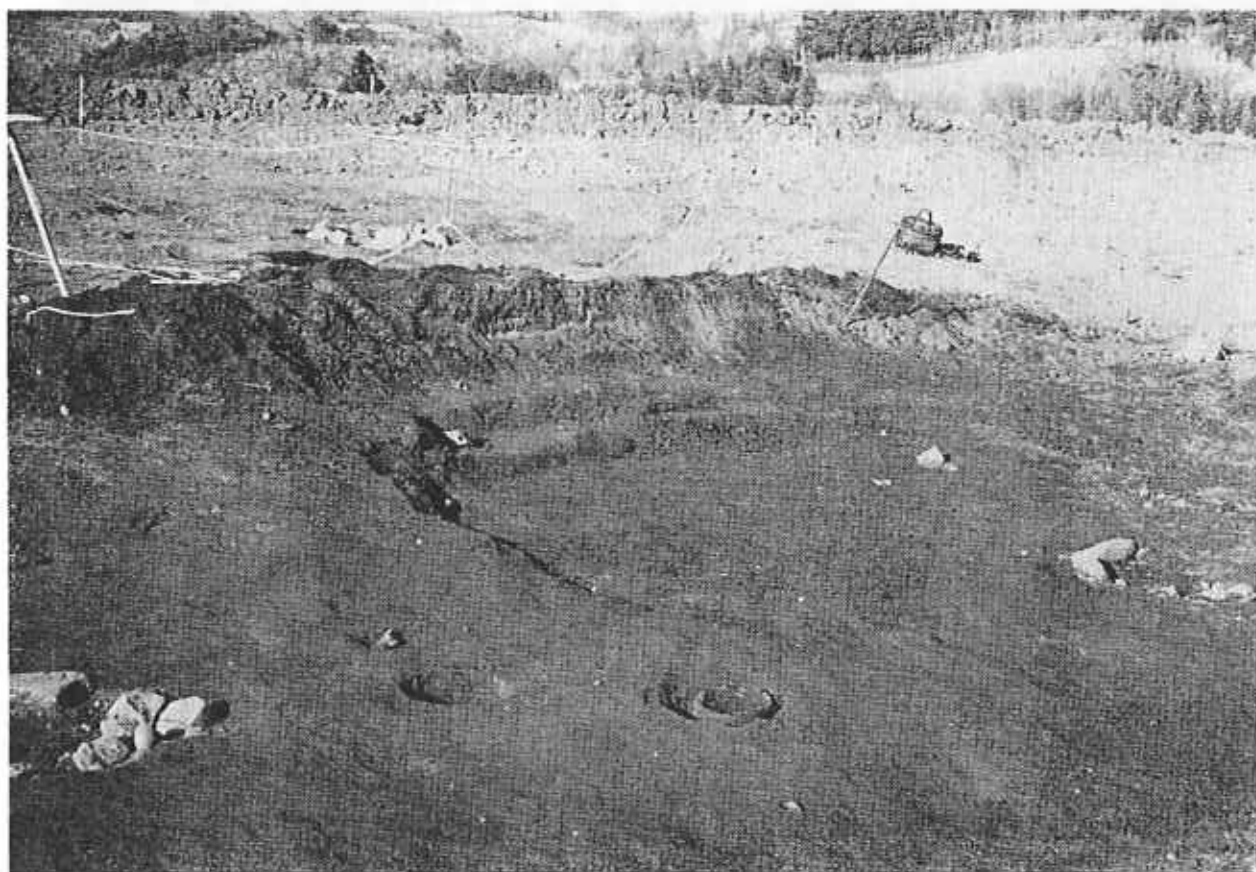
第 7 住 居 址



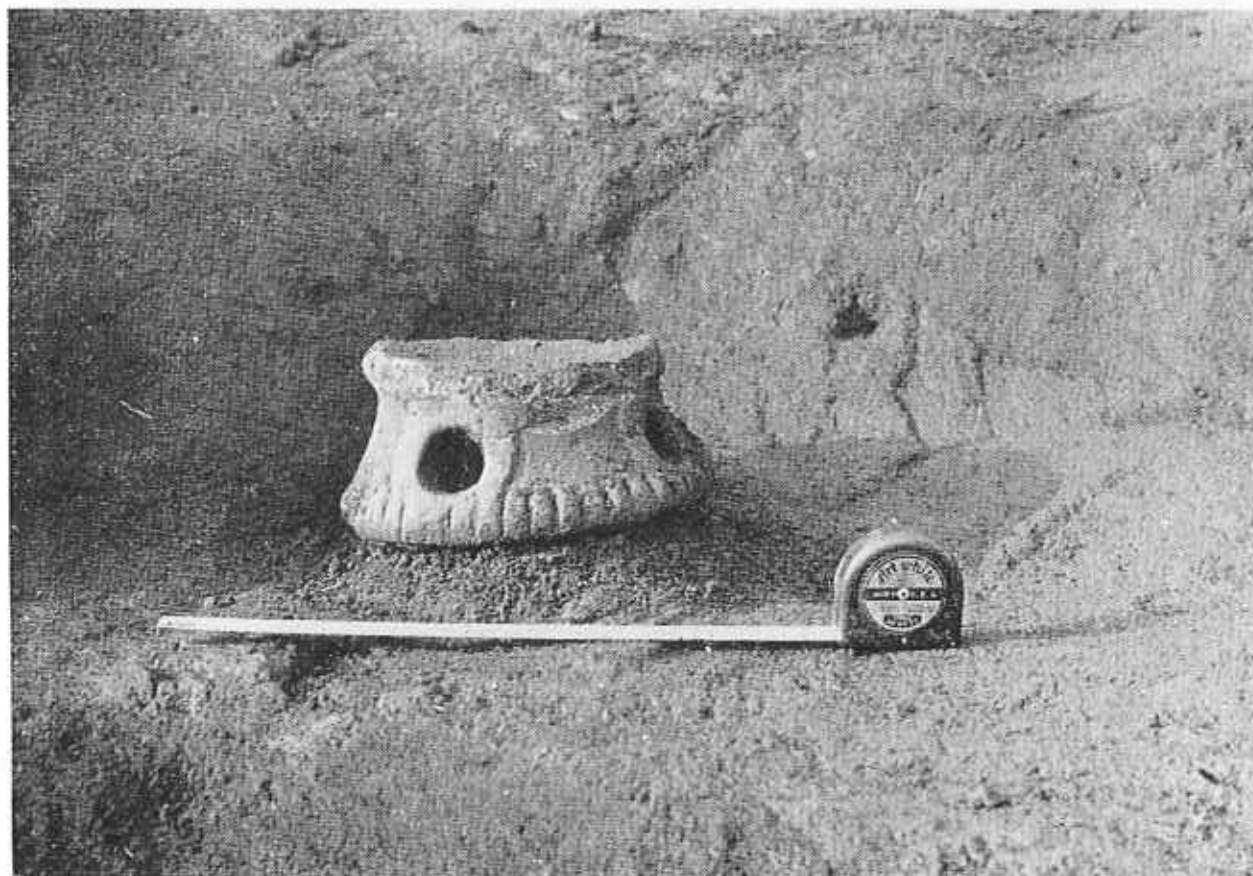
第 9 住 居 址



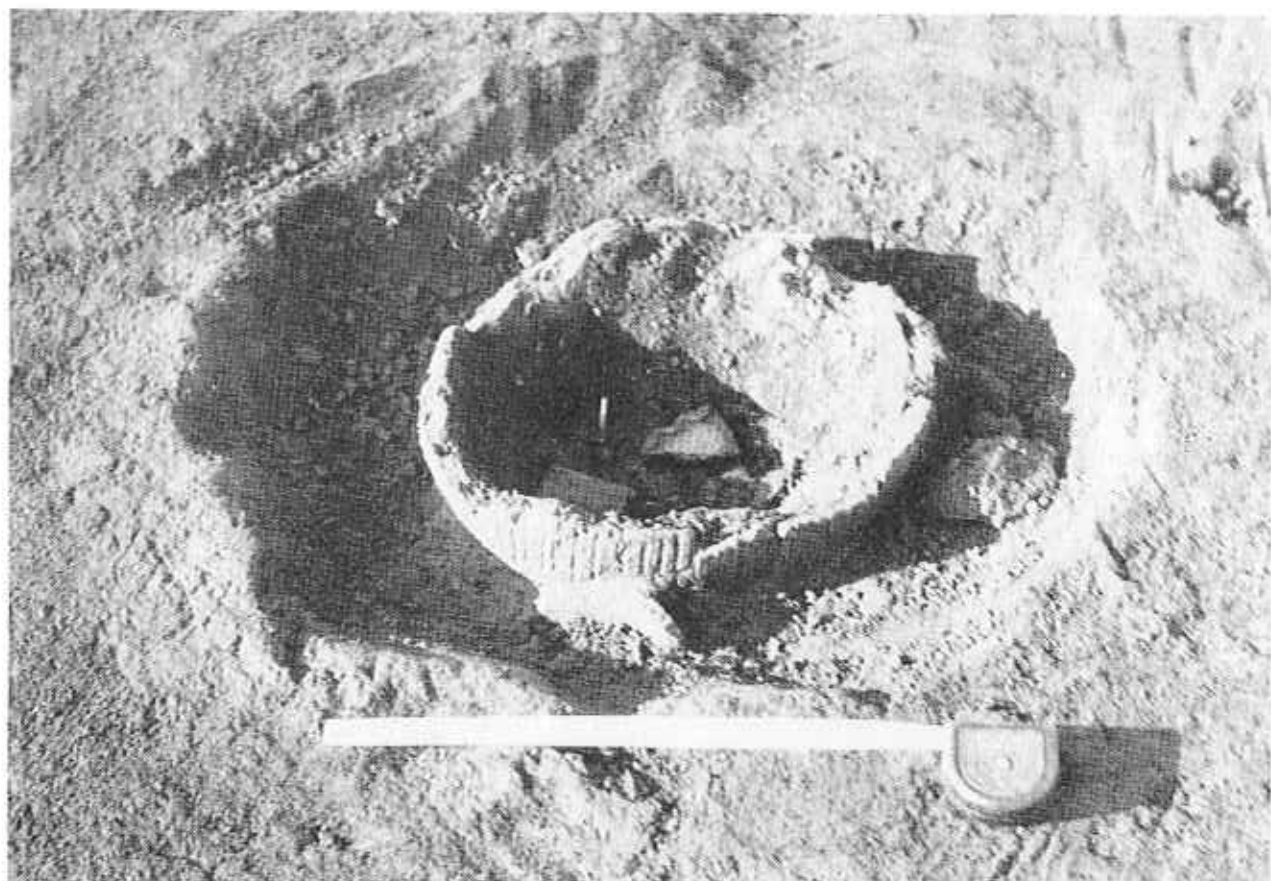
第 2 住 居 址



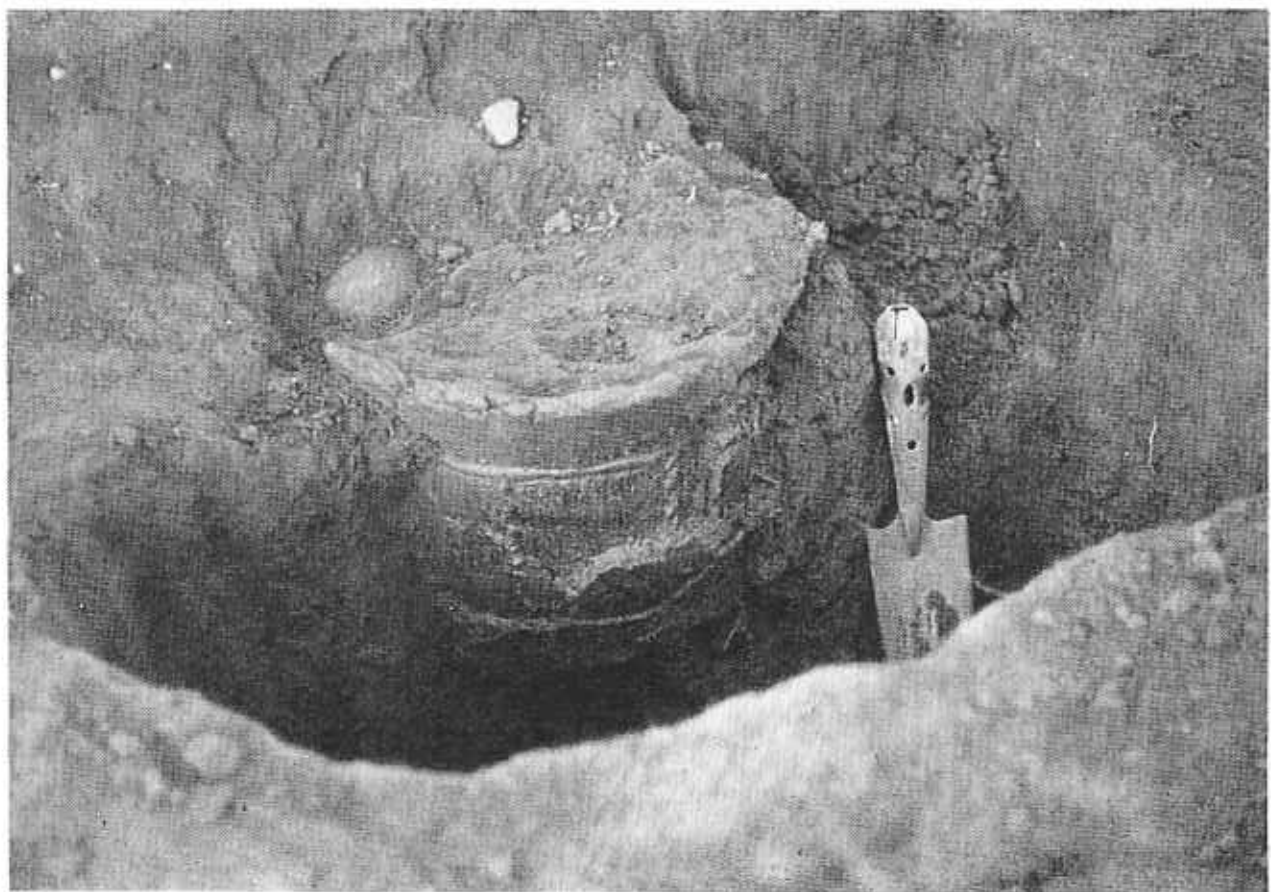
第6住居址（右）左は第5上は第1各住居址



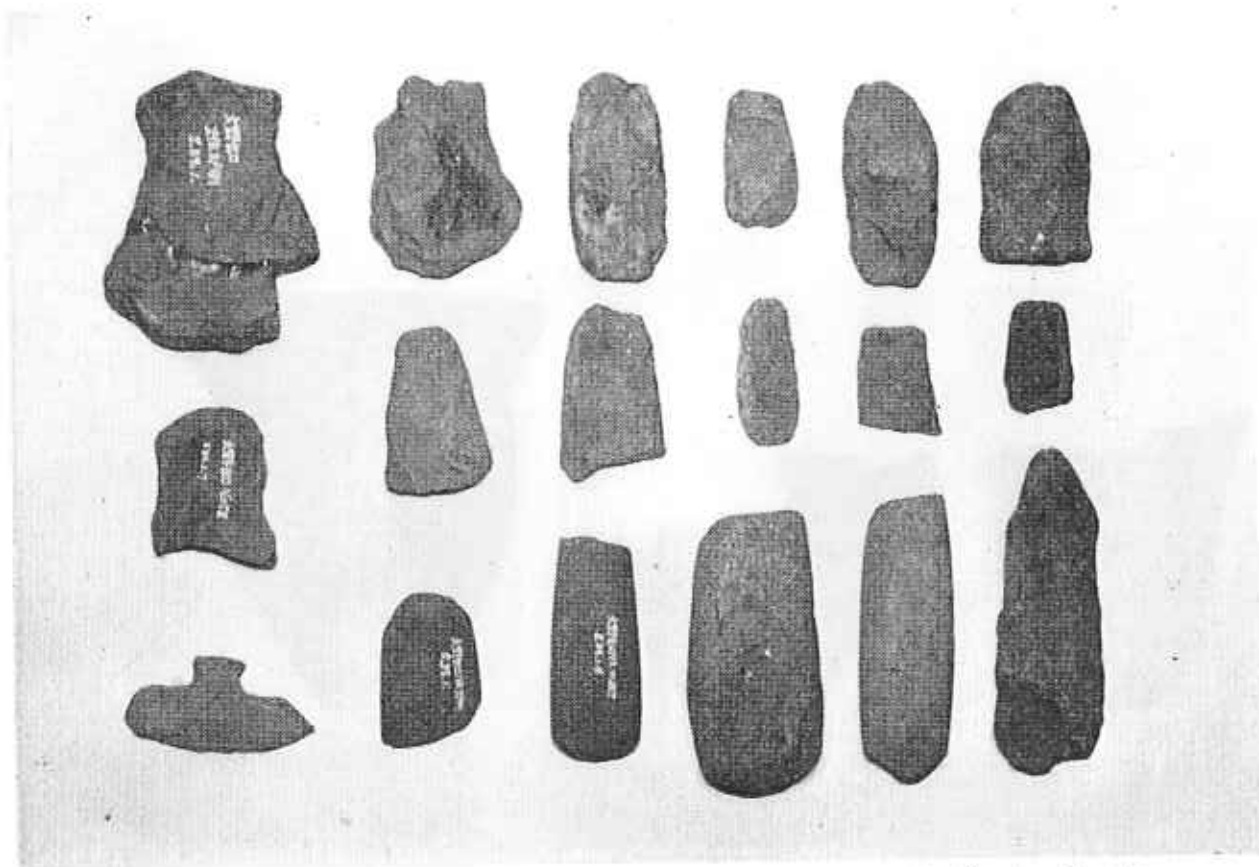
第6住居址張出部より発見の台付土器（台部）



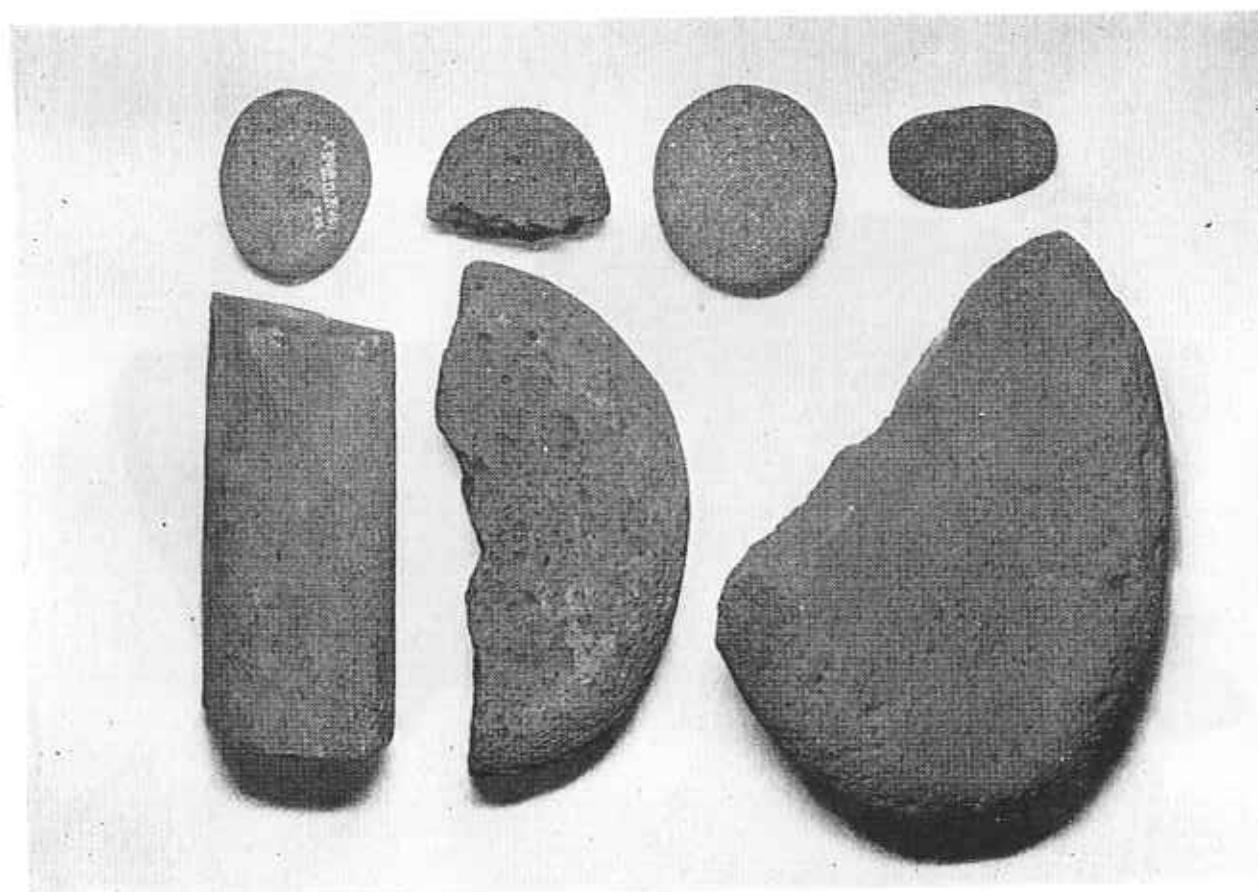
第5住居址床面南側よりの土器出土状況



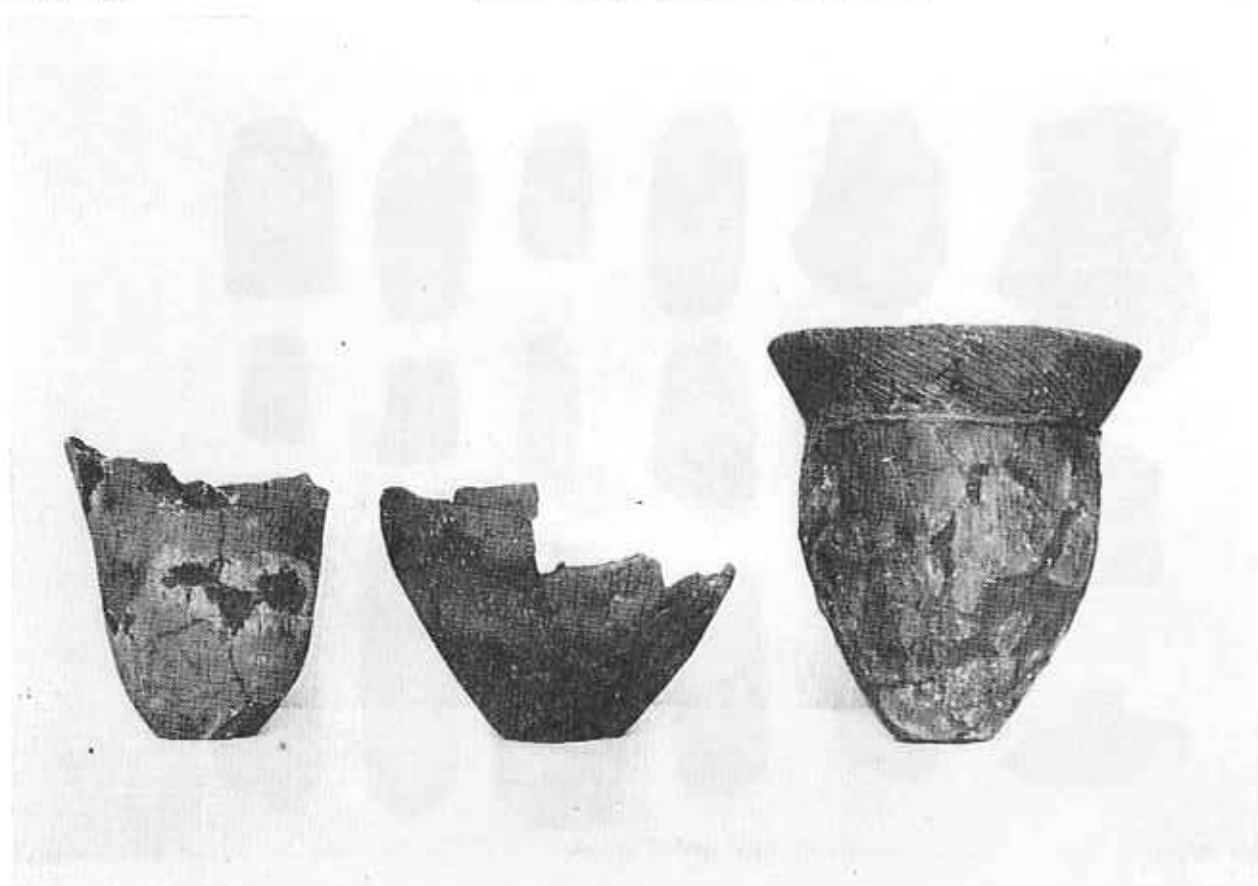
第5住居址床面北側よりの土器出土状況



石斧と石匙



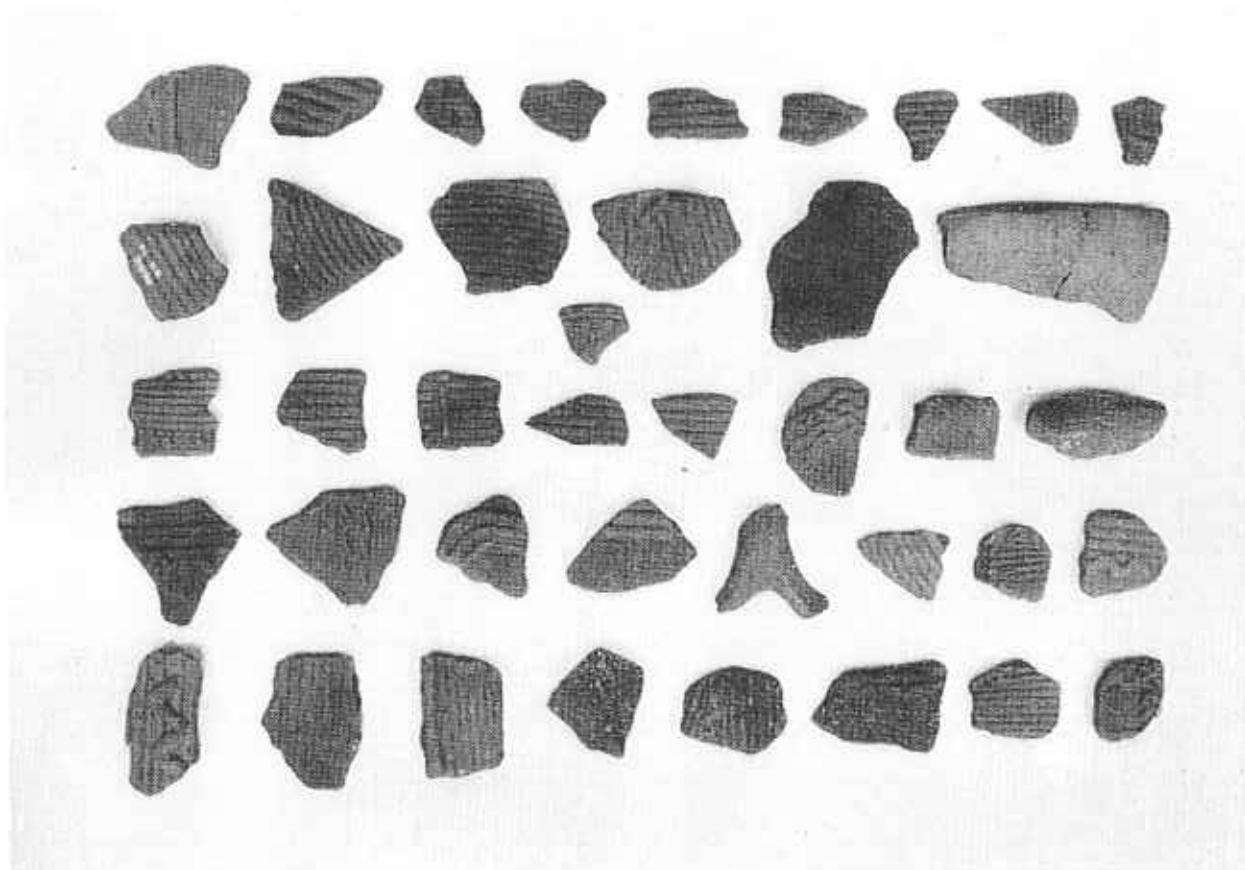
磨石・石棒・石皿・凹石



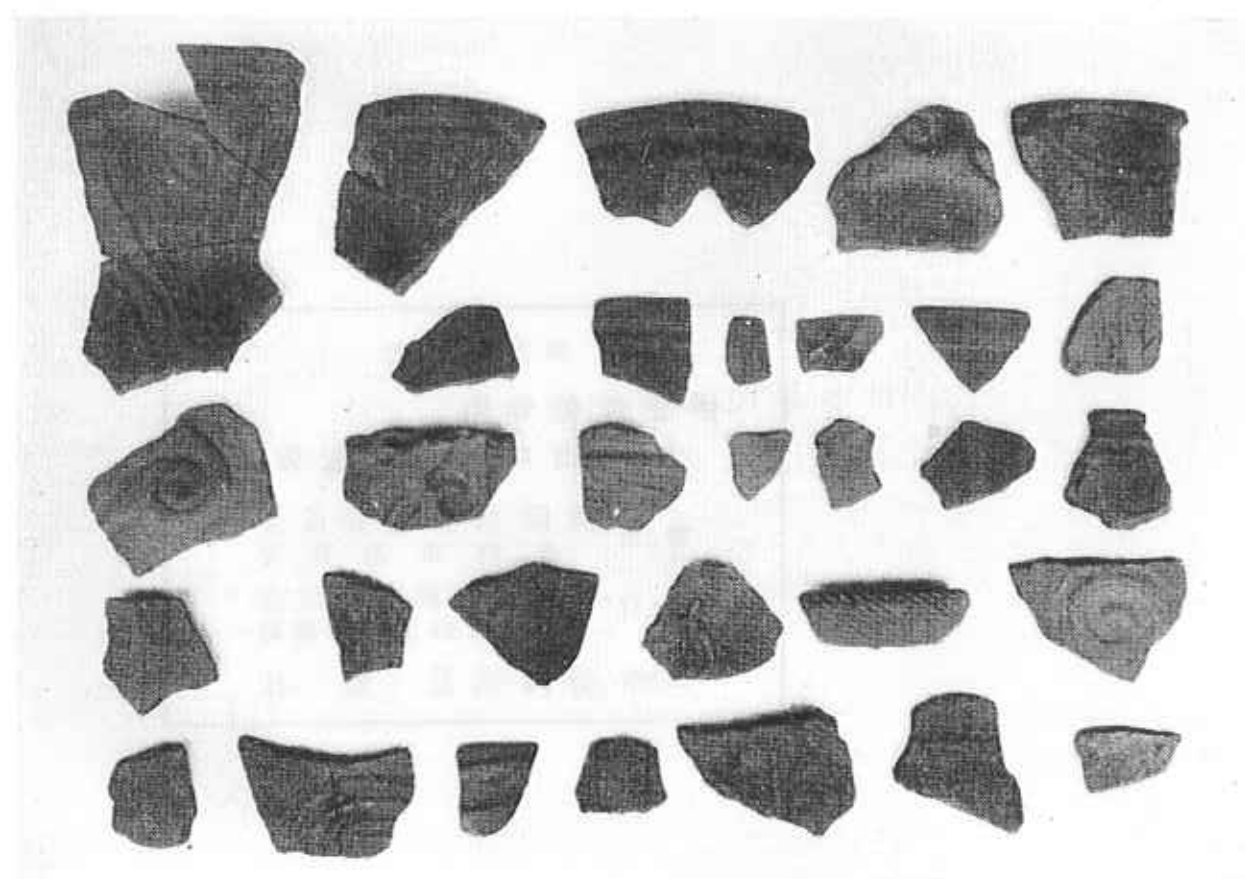
第12住居址出土土器(左)と第5住居址出土土器



左から第6、第16、第4住居址出土の土器



加曾利EⅠ式併行土器



加曾利EⅠ式併行土器

昭和39年3月

伊豆修善寺町

出口遺跡調査報告

編集 静岡県教育委員会
静岡市追手町

発行 修善寺町教育委員会
静岡県田方郡修善町

印刷所 静岡(株)星光社